第Ⅰ編　北見工業短期大学の設置と発展

第１章　北見工業短期大学の設置

（１）　大学誘致の動き

北見工業大学の前身、北見工業短期大学は、昭和35年４月１日付、国立学校設置法の一部を改正する法律～昭和35年法律第16号をもって設置された。およそ学府の創設は至難の事業であるといわれている。まして大戦前から大学・高専など高等教育機関が存在しなかったオホーツク内陸の北見地方の人口６万という小都市に大学を誘致することが、どれほど現実性を欠くものであったかは想像に難くないことである。

しかし大学は設立されたのである。それにはこれを促進する時の利、立地上の不利を克服する人々の努力、とりわけ誘致を推進した人々の情熱と緻密な計画と大胆な実行力、要路当局の深い理解と意志があったに違いなく、また思いがけない幸運が伴ったかもしれない。

時の利という点では、昭和30年代の初頭は、工学系の学府の設置の客観的情勢は次第に有利となってきた時期である。すなわち我が国は惨憺たる戦禍の荒廃から経済白書が「もはや戦後ではない」と述べたほど復興し、生産設備も輸出も戦前の水準をはるかに越え、消費革命といわれるように国内需要が伸び、経済の高成長に就こうとする時期で、産業界では機械工業、化学工業などへの設備投資が急増していたのである。しかもこのころ先進国では、原子力産業、電子工業など新しい産業が起こるとともにオートメーションの普及などの技術革新が進み、これに備えて新しい技術者の養成がしきりに唱えられていた時期であった。

このような社会の動向は、我が国の高等教育に対する新たな関心と期待とを生み出さずにはおかなかった。既に昭和26年という時点で、我が国の講和独立後の法制度の手直しの準備を進めていた政令改正諮問委員会は、基礎学力の充実した専門的職業人の養成を不可欠とし、高等学校３年と大学２年の過程とを組み合わせ、これを一本化した５年制の農業、工業、商業、教育などの職業教育を重んじた「専修大学」の新設を提案していたのである。その後この案は、中央教育審議会に諮問され、そこでは既設の短期大学制度の存在とからめてこれを討議し、新しい学校制度の案として答申を行った。その結果政府はこの学校を専科大学と呼称することとし、この創設を内容とする学校教育法の一部を改正する法律案を、昭和33年３月国会に上程した。そこでこのとき専科大学制度の成立を予想し、この機会に北海道東部に総合大学を設ける手がかりを得ようと企てたのが当時帯広畜産大学長として、赴任が決まっていた田所哲太郎であった。

田所は明治43年に東北帝国大学農科大学を卒業、その後多年北海道大学理学部教授を務め、理学部長となり、退官後、初代北海道学芸大学（現北海道教育大学）学長を９年にわたって務め、昭和33年１月帯広畜産大学学長に就任した人物である。明治の末年、まだクラークの大志の遺訓

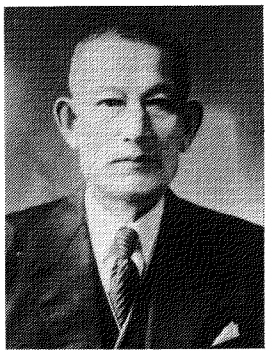
をよく伝える札幌の農科大学を卒え、パイオニア的気質をもち、大学づくりに若々しい情熱をもち続けていた田所にとって、豊かな開発の可能性をはらんだ道東の地は、その企図を育むものであった。田所は帯広畜産大学赴任が内定していた昭和32年の年末、赴任に先だって道東の釧路、帯広、北見の各市長を歴訪し、道東諸都市に分校を配置した総合大学設置の意見を熱心に説いたといわれるが、その後もほとんど毎週北見市を訪れ、市長にこれを力説、市長の意向を知りたがったと伝えられている。

昭和33年4月21日には田所の主導で道東3市の代表が帯広市役所に集まり三者会談が開かれた。席上田所は、「3市が一体となって道東地方の産業開発のため専科大学を設置しよう」と提案した。これに対し釧路代表は「趣旨については了承するが、帯広畜産大学側の説明ではまだはっきりしない点が多いので今後なお検討したい」とし、帯広代表は「道や中央の見解が不明だし、この点をはっきりさせる必要がある」と慎重を期して態度を保留した。ところが北見市長伊谷半次郎は、「北見、網走地区には大学がないので是非この構想で設置したい」と積極的な態度を表明した。そしてこの会談では5月下旬に北見市で道東3市代表会談をする話し合いをしたが、結局気運が盛り上がらず会談は行われなかった。

その一方、肝心の専科大学法案のほうも、戦後につくられてせっかく定着してきた短期大学の制度をこの中に吸収してしまうものであったため、私学の短期大学の関係者の法案に対する強い反対にあい、この国会では審議未了に終わり、その後もたびたび国会に上程されたが、ついに成立を見るに至らなかった。

この後、文部省では短期大学の制度を存続したまま、これとは別個に新たに主とし工業教育を進める5年制の高等専門学校の創設を計画、これが昭和36年の国会に上程され、6月公布施行をみ、翌昭和37年4月から高等専門学校が設置されるという結末をみたのである。

そのような次第で、第1回の専科大学法案が審議未了に終わったとき、遺憾の思いに駆られつつなお別途の手段で大学を設置できぬものかと思案をめぐらしていたのが田所と北見市長伊谷であった。戦後自ら市長の座を降りた高橋峰次の推薦を受けて、市会議長から市長となり、更に初代の民選市長に選ばれ、当時3期市長を勤めていた伊谷は、市長に初めて就任したころ、人口3万ほどの農村都市であった北見市にパルプ工場、精糖工場、東急傘下のバス交通及び諸行政庁の誘致を図り、市営上下水道、ガス事業及び道路舗装を早くから実現させた。また相内村との合併に成功、市内の小中学校建設、公園造成、市営住宅、壮大なパルコ型の霊園の建設など大いに公共事業を起こし、北見市を僅々十余年で人口6万の近代的商工業都市に脱皮させるのに手腕を発揮した人物であった。これらの伊谷の事業は、いずれも小都市の北見では無謀な先物買いと反対も少なくなかったなかを独特の強引さと政治的駆け引きをもって、その裏では緻密で周到な計画と準備を行って実現したものであった。



北見市長　伊谷半次郎

伊谷は専科大学法案が審議未了となるや、田所と文部行政に通暁した砂子茂帯広畜産大学事務

局長と協議、既成の制度に基づきまず北見市に短期大学を創設し、将来専科大学法案が成立したならば短大を専科大学に移行させる方途をたてたのである。そして伊谷は文部省の次年度の事業方針が７・８月中に固められるのを知るや、昭和33年６月13日、市議会に次のような議案を提出した。

「議案第19号　国立短期大学の設置について」

北見市に国立短期大学を設置するため昭和34年度から昭和36年度までの３年間に建設資金7,500万円と敷地５万坪を寄附するものとする

昭和33年６月13日

北見市長　伊谷　半次郎

この議案は原案どおり満場一致で可決、伊谷市長は短期大学創設の意志を公式に表明するとともに全市的支持を得たことになった。なおこのとき、短期大学創設のための資金となる助成金100万円を計上、更に短期大学設立期成会を発足させ、伊谷は自ら会長に就任し、地元選出国会議員を始め各界有志を役員に選出した。その後８月１日付をもって市では「国立短期大学設置に対する北見市の方針」を発表、資金が不足する場合には「その都度議会の議決を得て追加支持するよう万全の措置を講ずる」こととした。このような伊谷の資金的配慮と支持体制づくりの背後には、大学づくりを危ぶむ声があったことを視野に入れなければならないが、伊谷自身が不退転の決意を自らにも課したことになるのであった。

既に昭和20年代の終わりごろから伊谷は助役の宇佐美庫二に「北見に是非大学を設けたい」とおりに触れて語っていた。また昭和30年の３期目の市長選挙では、「市民に大学の誘致に向けて尽力する」と述べており、伊谷にとって現職の大学長田所との出会いは、かねての熱望を具体化する絶好のチャンスであったとみられるのである。昭和32年暮れから昭和33年の夏へかけての伊谷と田所の頻繁な交流は、明治生まれの気迫に満ちた老ロマンチストの目標を１つにした意気投合ぶりを示していよう。

昭和33年７月30日には砂子帯広畜産大学事務局長が北見市を訪れ、短期大学設置の陳情の手続き等について市当局と綿密な打ち合わせを行った。この段階では後述するように、短期大学を工業短期大学として発足する方針が固まっていたようで、短期大学を工科系のものとして詰めるに当たっては、田所及び杉野目北海道大学学長らとの協議と２人の示唆によったものとみられる。８月に入ると市長は、前述の人々の協力で作成された「北見工業短期大学設置に関する陳情書」「陳情要旨」「北見工業短期大学設置要項」を携え、市関係者を帯同して上京、灘尾弘吉文部大臣、高見三郎政務次官ら要路の高官に第１回の陳情を行った。このときの陳情の内容と理由づけは「陳情要旨」によると次の次第であった。

東北海道の教育文化は、はなはだ低く、人口約七万の都市四箇所の周辺に四十五箇の全日制普通高等学校を有するけれど、大学は定員僅かに百十名の畜産大学のみで、他に二年制度の学大分校を有するに過ぎない。道内の公私立大学全学生数のわずかに十五分の一を道東に有するに過ぎないために、道東都

市から遊学する子弟の年間の学資金額は数億にも達する。北見市に短期大学を設置することは、教育低文化の九牛の一毛を高めるためにも、また周辺全日制普通高等学校十七校の卒業生のためにも最も適当である。さらに北見短期大学を国立とする必要な理由は、国策である総合開発の産業技術者の養成である。

また「北見工業短期大学設置要項」によると、短期大学の位置は、北見市東相内町となっており、費用は校地取得5,000坪で2,500万円、校舎等建物建設費が1,282坪で6,412万5,000円、内容設備費が1,087万5,000円で合計1億円となり、これを北見市が負担するものとした。学科組織は、機械工学科、電気工学科、発酵工学科の3学科編成とし、定員を1学科30名、1学年90名とするものであった。以上の内容の陳情を終えて、市長は18日に帰着した。しかし折り返すように下旬に再上京、帰着後市民の前に、文部省当局が地元の熱意を受けて短期大学開設に関心を示したこと、9月から大蔵省との予算折衝に入ることとなった旨を明らかにした。9月下旬にも市長は福光良橘市教育長らを帯同して上京、4日間にわたり関係要路を訪れ、佐藤栄作大蔵大臣を始め大蔵省の文部担当主計官、同主査及び衆参両議院の大蔵、文教両委員会などに短期大学の次年度予算化を陳情した。しかし当時大蔵省当局は予算化に強い難色を示していたといわれる。

他方このような状況下にあって、杉野目北海道大学・田所帯広畜産大学両学長は、おりから全国の国立大学学長会議に出席するため上京中の北海道の国立大学長に呼びかけ、11月12日、神田の学士会館に会合し、北見工業短期大学設置を推進するとともに設置後も大学の完成に全面的に協力することを申し合わせ、文部大臣に次のような意見具申を行った。

「意見書」

昭和33年11月12日

文部大臣　灘尾弘吉殿

北海道大学長　杉野目晴貞
室蘭工業大学長　大賀　悳二
帯広畜産大学長　田所哲太郎
小樽商科大学長事務代理　室谷賢治郎
北海道学芸大学長　武田　一郎

北海道総合開発に必要な産業技術者の養成と文化の向上を図るため、東北海道の政治、経済、学術、文化等の中心地であり、更に各方面から考察して最も好条件にある北見市に国立の工業短期大学を設置することは、真に時宜を得たものと認め、ここに道内国立大学長連署の上意見を具申致します。

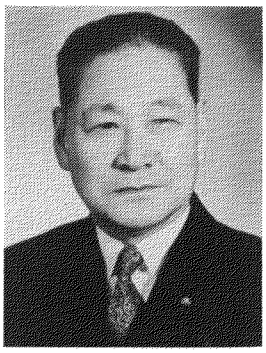
尚設置実現の上は、之が完成の為全面的に協力致します。

この意見具申が行われたとき、滞京中の伊谷市長は、5大学長に深い感謝の念をもったといわれるが、これ以後市長は北見と東京のピストン往復猛運動を展開した。すなわち11月中旬帰北、ほどなく上京陳情、12月初旬帰北、中旬上京、このときは年末まで滞京した。そして福光教育

長、石崎彦次北見市議会議長、寺前武雄（後の北見市長）、木村劼志（後の市議会議長）市会議員らを帯同、一同は一丸となって19日から関係官庁や私邸に文字どおり夜討ち朝駆けの陳情を開始した。22日歳末、払暁の宿舎を出発した一同は、星空のもと吐く息も白く、あらかじめ地元選出の松田鉄蔵国会議員の斡旋で早朝朝食前なら会いましょうと応じた佐藤栄作大蔵大臣の邸宅を訪問した。

次に河野一郎自由民主党総務会長の邸宅を訪問したが、佐藤蔵相のもの柔らかな応接にひきかえ寡黙な河野会長からは「あえて反対はしない」という応答を得たにとどまったと伝えられる。陳情はこの後も続けられ、25日午後に至っていったん見送られていた設置要求が、とにもかくにも復活要求をだす運びとなり、一同は帰北の途についたが、松田代議士、福光教育長、木村市議は残留、29日要路に最後の陳情を行った。

昭和34年１月４日、北見市に工業短期大学設置に関する調査費10万円が国より計上されたという電報が市に届いた。この調査費計上をもって、昭和35年度短期大学設置のめどがついたと了解した市長はじめ関係者は、既倒を立て直した結果にわき返り狂喜したといわれ、彼らは６日の夜行で急拠感謝のため上京した。まだ見ぬ大学に対し、素朴な憧憬をもつ、雪に埋もれた北辺の小都市の市民は、地元に本当に大学が建つのだという新鮮な驚きと喜びに包まれた。なお当時、北見市助役として伊谷市長の活動に綿密な補佐をしていた那須二一は、「この好結果を引き出すに当たって、陳情団の陽動もさることながら、文部当局要路に大学の設置の必要を示唆し、また北見市側に要路への的確な折衝の対象とタイミングと進め方を助言した杉野目北海道大学学長の影響力の大きさは、暗闇に光明を仰ぐ思いであった」と述べている。北海道における高等教育の拡充に強い情熱をもち、それを推進した実績豊かな杉野目の、もう１つの大学をという説得は、当局の関心を喚起するにあづかって大きかったものとみられる。



北大学長　杉野目晴貞

短期大学設置への見通しをもった北見市当局は、第２の難関である総費用５億円、建築費だけでも３億7,500万円は必要ではないかとその筋から示唆され、小さな都市の北見では年度の一般会計にも相当するこの費用の調達は無理ではないかと危ぶまれた設置資金づくりに立ち向かうこととなった。事実、当時の北見市は人口７万、年度一般会計は５億6,000万円余に過ぎず、通常の方法では到底調達しうる金額ではなかったので、文部省当局の係官も伊谷市長の大丈夫という答えに危惧をもち、那須助役に改めて大丈夫なのかと、念を押したといわれるほどだったのである。

これに対し伊谷市長は、２月24日、「市としては政治的折衝での財源の獲得が問題だ」と語っているが、裏づけのある腹づもりがあったようである。かねて伊谷は、北見地方に事業を進出させていた東京急行電鉄株式会社の五島慶太会長と面会の機会を得ており、このとき伊谷とともに上京同伴して五島に面談した石崎議長は、伊谷が五島に大学建設の熱意を披瀝（ひれき）し、社会的成功者である五島の教育事業への尽力の意義を強調、資金援助を懇請したのに対し、五島から好意的な

感触を得たと回顧して述べている。

その後4月上旬に至って、伊谷は「東急会長五島慶太氏に無条件で1億円の寄付を申し込んだところほぼ了解を得た」という報道を行った。これに意を強くした北見市は、市費1億円余を拠出することを決し、更に道と北海道市長会から各2,000万円、北海道町村会と網走管内町村会から各500万円、地元から2,000万円の寄付を仰ぎ、合計2億7,000万円の資金調達計画を立て、市幹部はそれから募金行脚に出張の日を重ねることとなった。7月13日には、東急からの寄付1億円の受領式が市議事堂で行われ、北見市長名で東急会長及び社長に感謝電報が打電された。

これに前後するが、5月16日には、文部省大学学術局長緒方信一が北見へ出張視察を行い、氏の談話として北海道新聞紙上に「受入れ施設のないところに国立大学を建てるのは戦後はじめて。北見の工業短大設置予算は35年度に計上されるかどうかわからない。これから設立準備委員会をつくり専門的に検討する」という記事が載せられた。また7月4日には大学学術局技術教育課長岩間英太郎が北見へ出張し、市が用意した市内野付牛公園東側の工業短期大学予定地（現大学所在地）を視察、水道、都市ガス等、供給その他立地上の特色などの説明を聴取したが、これら関係高官の現地視察に対し、北見市民は当局が短期大学設置への事実上の準備を真剣に開始したものと受けとめたのであった。この後、北見市が作成した北見工業短期大学の設置計画は次のとおりであった。

国立北見工業短期大学

一、学　　科　機械科　応用化学科　但し近い将来、電気科を含む三学科とする。

二、修業年限　2ヵ年　但し将来、専科大学とし、高校程度の予科3年を含む5年制の技術者養成の大学とする。

三、設置場所　北見市公園町及び東陵町

四、施設費及びこれが資金計画別紙の通り

北見工業短期大学施設、設備費内訳

一、施設費

1　建　　物

区　　分	構　　造	坪数(廊下等含む)	単　価	金　　額
管　理　部	鉄筋ブロック造	181坪	55,000円	9,955千円
一般教育関係研究室	〃	39	55,000	2,145
講　義　室	〃	151	55,000	8,305
製　図　室	〃	130	55,000	7,150
図　書　室	〃	68	55,000	3,740
共通実験室	鉄筋コンクリート	143	75,000	10,725
機械科研究室	〃	491	75,000	36,825
応用化学科研究室	〃	319	75,000	23,925
特殊附帯設備				20,000
計				122,770

2　校地等

区　　分	数　量	単　価	金　額
校舎用地購入費	39,500坪	400円	15,800円
〃　整地費			7,500
道路用地購入費	4,400	600	2,640
道路築造費			2,860
補償費	30,000	40	1,200
計			30,000

二、設備費

区　　分	数　量	単　価	金　額
機械科標本・機械・器具費			24,000千円
応用化学科標本・機械・器具費			15,000
図書購入費	9,000冊	4,500円	4,500
計			43,500

（備考）　一般教育関係3,000冊　専門教育関係5,200冊　学術雑誌25種

三、調度設備

調度設備費　10,000千円

四、その他の施設、設備

区　　分	数　量	摘　要	単　価	金　額
職員住宅建築費	20戸	鉄筋ブロック造	1戸当　1,100,000円	22,000千円
職員住宅用地購入費	897坪		坪当　1,000	897
体育館建築費	200	鉄筋ゲビオン構造	坪当　57,000	11,400
寄宿舎建築費	392	鉄筋ブロック造	坪当　55,000	21,560
水道配水工事費	1,640米		米当　3,000	4,920
ガス配管工事費	2,700		米当　2,500	6,750
計				67,527

合計　273,797千円

資金計画

金　　額	財　源	摘　　要
100,000千円	寄附金	東京急行電鉄株式会社
20,000	〃	北海道
20,000	〃	北海道市長会
5,000	〃	北海道町村会（除く網走町村会）
5,000	〃	網走町村会（23ヵ町村）
20,000	〃	地元寄附
103,797	市　費	北見市

合計　273,797千円

以上をみると、前年北見市が当局への陳情のときに作成した計画では、短期大学敷地を相内町に予定していたものを公園町と東陵町内に変更したこと、総経費が1億円から実際に必要とみられる2億7,000万円余に増加したこと及び学科組織が機械、電気、発酵の3学科であったものを機械、応用化学の2学科をもって発足し、近い将来に電気科を設けることとしたことなどが注目されるが、この設置計画こそが後にほぼ実現の運びとなったものであった。

（2）　設置の具体化

文部省では、昭和34年7月1日付をもって北見工業短期大学設置準備会の設立を裁定した。委員等の氏名は次のとおりであった。

委員長　大学学術局長　緒方　信一
委　員　大臣官房人事課長　天城　　勲
〃　管理局教育施設部長　田中　徳治
〃　北海道大学長　杉野目晴貞
〃　帯広畜産大学長　田所哲太郎
〃　北海道大学工学部長　大坪喜久太郎
〃　北海道大学事務局長　美作小一郎
〃　北海道総務部長　柴田　　護
〃　北見市長　伊谷半次郎
〃　北見市議会議長　石崎　彦次
幹　事　大学学術局庶務課長　蒲生　芳郎
〃　同　大学課長　春山順之輔
〃　同　技術教育課長　岩間英太郎
〃　管理局教育施設部計画課長　中尾　龍彦
〃　北見市教育長　福光　良橘

７月16日には、第１回の設置準備会が文部省の第１会議室で開催された。その結果、短期大学の敷地は、４日の岩間技術教育課長の現地視察に基づいて、ガス、水道の配管の便のよい公園町と東陵町の予定地を是とすることになった。建物については文部省の管理局教育施設部が中心となって、設計にはかねて北見市が交渉を進めていた太田実北海道大学工学部助教授（後に教授）に委嘱することになり、建物の完成を昭和35年３月中とした。また教員組織、教育課程、学則及び設備については、委員中の大坪北海道大学工学部長と美作北海道大学事務局長が中心となり、専門委員を委嘱して検討することとし、短期大学事務職員の人選については北海道大学事務局と文部省とで協議することとした。

この設置準備会後、当事者の間では早くも設立した場合の教官の人選、打診を開始したようで例えば設立とともに赴任した佐々木満雄教授は当時室蘭工業大学の助教授であったが、「９月５日に北大の恩師の大塚教授からすぐ札幌に来るように言われ、早速札幌に参りお前は北見工業短大の教授として赴任するように言われました」と述べており、その日、大塚教授と杉野目学長を訪ね学長から短期大学設立後４年制大学に昇格させる含みの激励を受けたと回想している。後に昭和36年、講師として赴任した清水昭典もほぼ同じころ、北海道大学一般教養主任の松岡修太郎教授から指導教官の矢田俊隆教授を通じて短期大学の名をあげて就任の意向を問われ、更に赴任の準備を心がけるよう示唆されている。これをみると、当時杉野目学長から北海道大学内の関連諸教授に短期大学の人事について示唆ないし依頼が行われたとみることができよう。

このような中央や北海道大学の動きに対し、地元では北見市が校舎敷地の入手について、かねてから土地所有者との交渉を進めていた。既に４月に北見工業短期大学設立期成会が公園町及び東陵町の農家、田尾進、垂石慶治、菊地恵一、平田喜代太、田村重雄の５氏から農地合わせて９万1,356m²余を820万円余で買収する手続きを進めており、これに接した大蔵省普通財産である北１線道路（現北見工業大学裏斜面道路）2,331m²余の使用許可を得ていた。

また７月からさしあたって校舎を建設する用地１万6,000m²の整地について、市では陸上自衛隊美幌駐屯地部隊に出動を要請、これを受け入れた同部隊では、第６普通科連隊細野義雄三佐が指揮をとってブルドーザーによる整地を開始した。かくて前年までビート、小麦、デントコーンなどを栽培していたやや中央がへこんだ丘陵の緩斜面は、機動力による周辺の凸部から凹部へ向かう土寄せと野付牛公園及び６号線の両外側への土の押し出しによって、火山灰の赤土の広い平たんなさら地へと変貌した。

８月26日には、北見工業短期大学新営工事請負人として東急建設株式会社が指名された。同社は９月１日より校舎鉄筋コンクリート２階建て4,912.26m²工事費１億710万4,574円の請負中の第１期工事として2,510.15m²の工事に着手した。11月下旬には、第１期工事の外郭工事ができ上がり、当時国道39号線から目を遮るもののなかった冬枯れの丘上に建物の外形が望まれた。この建物は、すべてが完成すると、学長室１、研究室14、普通講義室４、合同講義室２、製図室２、図書室１、事務室１、非常勤講師室１という内容を備えるものであった。

他方９月16日には、文部省で第２回北見工業短期大学設置準備会が開かれた。この会合は文部

省が大蔵省に対する短期大学設置に関する予算説明を行うための準備として開かれたが、このとき建物設計者と落札者が改めて確認され、設備と人事についても一歩進めた審議が行われた。設備については文部省係官から図書の設置基準が1学科4,000冊で、1学科増すごとに3割増とし、計5,200冊をそろえることが審査を通過する必要条件であると示唆された。人事については、教員の定員数が話題となったが、まず北海道大学工学部長事務代理の黒岩保委員から教授11、助教授10、助手9とする案が提示され、これに対し大学学術局長の緒方委員長から先に設立をみた久留米工業短期大学の定員と同じ教授8、助教授6、助手4を目標として検討したいという意向が示された。また今後準備会には新たに委員として室蘭工業大学学長大賀悳二を加えることとし、準備会が協力を委嘱する教官として、北海道大学工学部長事務代理黒岩保、同機械工学科久野陸夫、同応用化学科渡辺貞良各教授を決め、更に同じく事務職員として北海道大学事務局庶務部長大友端立、同経理部長笠原英一ら14氏を決めた。

以上の準備に伴って、9月30日付をもって次のような設置認可申請書が文部大臣あてに提出された。

「北見工業短期大学設置認可申請書」

昭和34年9月30日

文部大臣　松田　竹千代 殿

北見工業短期大学設置準備会委員長
文部省大学学術局長　　緒方　信一

このたび北見工業短期大学を設置したいと思いますから、学校教育法第4条の規定によって御認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします。

この申請書には、別紙書類として設置要項、学則、図面添付の校地・校舎、図書・標本、機械器具等の施設、学科別学科目、修業年限及び履修方法、学科別学生定員、職員組織、将来の計画など、詳細を極めた設置内容を示す文書が添付された。この内容の多くは、そのままないしわずかな修正を施しただけで、開学とともに実現されたので、先に北見市が提出した計画書よりいっそう精密なものであった。そしてこの内容は後の設置審査の基準として取り扱われるに至った。ただ職員組織については、表にみられるように、申請時の定員が学長1、教授9、助教授8、助手6、技術員2、事務員16、その他10、合計52名となっており、実際の短期大学の完成時の昭和36年4月1日時の学長1、教授8、助教授8、助手4、職員19、合計40名という数字をみると、実現の過程で、教授1、助手2、職員9名の縮小があったことが知られる。

年が明けて昭和35年1月30日、第3回北見工業短期大学設置準備会が都内の社会事業会館会議室で開かれた。このとき委員長となる大学学術局長は緒方信一から小林行雄に、同局技術教育課長も岩間英太郎から犬丸直に替わっており、犬丸課長が会議の進行を司った。この会議で主として審議されたのは、前掲設置申請書添付の設置要項と教員組織に関すること及び初年度学生募集と入学試験に関することであった。

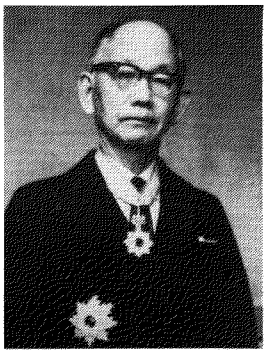
北見工業短大創設と定員

	短大設置審議会（昭和34.9.16）		短大設置認可申請時（昭和34.9.30）	短大完成時（昭和36.4.1）
	黒岩北大工学部長代理案	緒方大学学術局長案		
学長	1	1	1	1
教授	11	8	9	8
助教授	10	6	8	8
小計	22	15	18	17
助手	9	4	6	4
小計	9	4	6	4
技術員			2	19
事務員			16	
その他			10	
小計			28	19
合計			52	40

そして学生募集と入試事務については北海道大学に協力を求めることとなり、北海道大学内に委員会を組織し、委員会に募集要項の作成、入試問題の作成、願書受付、試験場の決定などを依頼することが決定した。教員組織の具体的人事については、五十嵐技術教育課長補佐より、「前日の１月29日、大学設置審議会が教官の審査を行っており、教員組織の審査の結果は大部分は申請どおり判定されまして成立いたします」との報告があった。しかし肝心の学長人事についてはいまだ進捗（しんちょく）していないことが明らかにされ、今後学長の選考については別途、大学学術局長、北海道大学学長、室蘭工業大学学長及び北海道大学工学部長の４者で打ち合わせを行うこととなった。この後２月12日には２月３日開かれた大学設置審議会の審査会の審議に基づいて、委員の杉野目北海道大学学長が小林行雄委員長の代行として北見市へ実地審査を行うこととなり、黒岩保北海道大学工学部教授、大友端立北海道大学庶務部長及び小林義男室蘭工業大学庶務課長を帯同出張し、設備等の整備状況を12、13の両日にわたって視察した。12日、杉野目は市役所で新聞記者と会見、次のように述べた。「伊谷市長、関係者らの努力で、北見に大学が生まれるのは道東の教育振興のため望ましいことで、短大の産婆役を引受けた北大は道内学長会の支援もあり、できるだけ協力する。教授陣は十日以内に決まる。北見では短大の敷地、校舎の工事進行状況を視察するほか、機械、器具、図書、標本などの準備が申請書どおりに行われているかを調べ26日までに文部省に報告する」。

視察の結果は報告書にまとめられ、校舎、図書、機械、器具、標本などの整備については開校に差し支えない旨が報告され、更に添付書類に教職員住宅10戸を建設し、これを専用に充てる旨が報告された。ところで杉野目が視察した日に「教授陣は十日以内に決る」と述べたのは、この日には教授人事は固まっていたのであるから、「十日以内」ということばは学長人事を含めた教授人事を意味するものとみられる。そしてこの学長人事に具体的な見通しがついたのは、実にその１か月余の後であった。すなわち開学の日付を２週間後に控えた３月17日、かねて設立準備

委員会の強い勧奨を受けていた北海道大学名誉教授で、当時室蘭工業大学教授を定年退官する予定の佐山総平がようやく学長就任を承諾する意志を表示、関係者をほっとさせたのであった。



初代学長　佐山総平

佐山はこの後設置審議会の審査を経て4月1日付、文部事務官行政職の高官に配置換を受け、北見工業短期大学学長事務取り扱いを命ぜられた。このような異例とみられる措置は、当時増員として新規に採用されるすべての文部教官の俸給の支給は、国会の予算議決の案件となっており、この議決が日米安全保障条約の改定をめぐる国会審議の紛糾裏に延引をしたためで、とりあえず佐山を文部事務官の高官とし北見工業短期大学在勤を命ずる措置を取って俸給の支給を図ったものとみられる。

ところで後年の佐山の談によると、佐山はかねて杉野目から短期大学学長就任を勧められていたが、「杉野目さんには断りつづけていた」という。また佐山の後年の随筆集『冬日』によると、「何の廻りあわせかしらないが、今回私は新設されたK工業短大へ行き、また若い学生相手にしばらく仕事をしなければならないことになった。おかげで停年の楽しみはすっかり吹き消されて、実は憂うつな何日かをすごしたが、そんなわがままは長く許されないから今日から志をあらためて、与えられた仕事にはげむつもりである。―中略―　実は私は、多くの人々の上に立って華々しく振舞うことはあまりすきでなく、なるべく自分でやりたいことをやって、自由に暮して働きたいたちである」と述べているが、「憂うつな何日か」というのは、それに先立つ期間があって最終的な詰めの日数だったのではなかろうか。しかし就任受諾の4日後の3月21日、早くも佐山は、既に短期大学教授に内定していた羽鳥勝春室蘭工業大学教授と同じく教授内定の佐々木満雄室蘭工業大学助教授を帯同して北見市を初訪問した。佐山らは伊谷市長、那須助役から今までの経過についての説明と今後の計画について懇談を重ねた。そして3日後の3月24日、佐山は北海道大学本部事務局会議室で、羽鳥、佐々木2氏のほか、初年度に教授として赴任が内定していた伊藤昌明、助教授内定の石井純、後藤健三、講師内定の追分重義、山本幸男の諸氏と初顔合わせを行った。この日の夕刻、出札していた伊谷市長と福光教育長は以上の8名を市内薄野の料亭「川甚」に招待し、丁重な初対面のあいさつを行った。経済人や政治家、地方名士などと交際の多い伊谷も大学の教官とはあまりなじみがなかったようで、大学院を終わってきたばかりの若い教官らは、伊谷の丁重さにひどく恐縮したという。

初代学長となった佐山は、明治26年栃木県に生まれ、一高を経て大正8年東京帝国大学工科大学採鉱科を卒業後、三菱鉱業に入社、大正12年新設内定の北海道大学工学部に就任の見込みをもって退社、文部省留学生として英、米、独、仏国に留学、この間やはり北海道大学工学部に就任するほとんどの面々とロンドンで初会合、テームズ川で舟遊びをしたというベルエポックのエピソードをもつ。大正14年に工学部の鉱山学科の教授に就任、昭和32年定年退官まで北海道大学に勤務した。その間我が国の産業の主要エネルギーを供給していた炭鉱の採鉱計画、保安技術の権威として多くの技術者を育て、また実地に鉱山に多大の貢献をするとともに鉱山に関係のある行

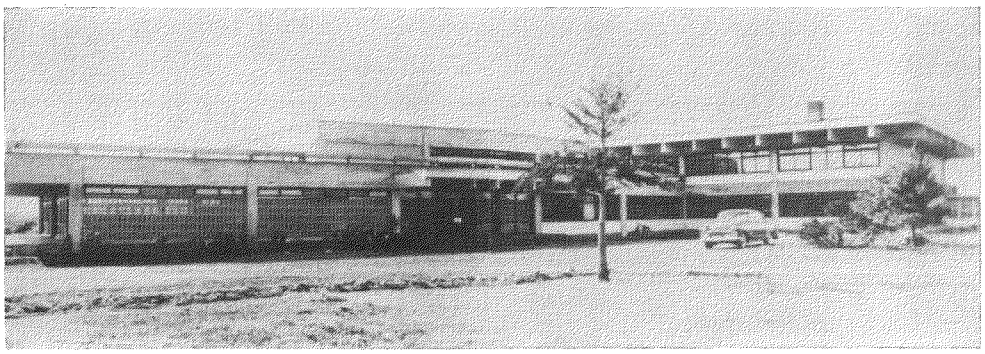
政庁の各種委員を勤めた。佐山が北見に赴任すると、明治生まれの旧帝大教授、66歳の学長という肩書に、少しばかりいかめしい威容を想像していた市民は、自転車にうちまたがってスーパーマーケットに出かけ、冬はスキーを駆って坂道を疾走通勤する若々しさ、北関東の方言混じりのくだけた会話、およそ辺幅を飾ることのない態度に意表を突かれたものであった。

学長を始め新任の教官、職員が、当時としては北見市が高額の建坪単価をはずみ新築した野付牛公園のポプラ並木の傍らの白亜の２ＤＫの10戸の住宅に落ち着いたのは４月に入ってからであった。このときの１人、伊藤昌明教授の日記によると、伊藤は４月９日宿舎入り、既に佐々木教授、石井助教授が入居しており、10日には後藤助教授、15日林芳次事務長、19日には学長が入居、陸続と着任した様子がしのばれる。なお、これにさかのぼって３月２日には北海道大学で設立準備委員会が開かれ、学生募集要項を定め、入試の日程を４月30日から５月２日までとし、初日に国語、外国語、２日目に理科、社会、３日目に数学を課することとした。現地北見では、市役所の一室で４月20日ころから短期大学事務官らが入試の事務に就き始めた。４月28日には佐々木教授が東京で印刷した試験問題紙をリュックサックに背負い、戦後のかつぎ部隊さながら混雑した列車に揺られて北見まで運んだ。またこの日から北見市旅館組合では、北見駅前にテント張りの受験生案内所を特設し、１泊450円で宿舎の案内を始めた。受験当日の朝、市では８時半に試験を開始する東陵中学校まで臨時バスを運行する手配をするなど全市的にいたれり尽くせりの便宜を図った。なお、このときの受験者数は定員80名に対し142名（願書提出者161名）で倍率は1.775倍となり、当事者の見込みよりは低率であったと伝えられている。

（３）　開学と組織・設備の整備

入学式

昭和35年５月20日午前10時、北見工業短期大学第１回の入学学生の入学式が同学図書室（現会計課、施設課事務室の位置）で開かれた。式場には教職員と80名の新入生のほか、約100名の来賓が市役所から４台の貸切バスに分乗して来学出席した。佐山学長は式辞で本学の目的、使命な



開学時の北見工業短期大学校舎

どを語り、特に自身が多年工業技術者を育ててきた経験をふまえて次の点を強調した。

私は教育上最も大切なことは、第一は健康で即ち丈夫な身体を作り併せて健全な精神を養うことは、青年教育の根本義であると信じます。第二は、これからの技術者は出来るだけ合理的にものを考え、また能率的に行動できる人間でなければなりません。最後に申したいことは、これからの技術者は他の人々とよく協力し、互に助け合って仕事が出来るものでなければなりません。所謂(いわゆる)独善的で協調性に乏しい技術者気質(かたぎ)の人は、昔はこれでよかったかもしれないが、今後はこういう技術者は大勢な人々といっしょになって大きな仕事を行うことができません。以上三つ即ち、健康、合理、協調が私個人として、長い経験による技術者教育上の根本的な理念でありまして、こう云う基礎と雰囲気の中に、技術教育を行うて、初めて真に、時代の要求に応ずる有能な技術者をつくることが出来るものと確信いたします。なお、直接技術上の教育については、夫々有能な担任教官が深い愛情をもって授業および指導を行うはずでありますから、どうか学生諸君は各教官をよく信頼して勉学に励み明朗にして希望に満ちた学園をつくるよう励んで下さい。私も微力ながら、誠実をもって学長の職に当り、ハッタリやごまかしの無い正直な大学をつくるよう努力する決意であります。

ついで参会者のなかから、次の人々が各界を代表して祝辞を朗読した。小林行雄大学学術局長(代読)、町村金五北海道知事(代読)、伊谷半次郎北見市長、松田鉄蔵代議士、信田隆治網走支庁管内町村会会長、土田耕治網走支庁管内町村議会議長会会長、田所哲太郎帯広畜産大学学長、石崎彦次北見市議会議長、小西博俊芝浦精糖所取締役所長、滝野啓次郎北見商工会議所会頭、次いで新入生を代表して夕張南高校出身機械科の貫田元紀が入学者宣誓を行い、正午式典を終了した。午後からは、北見柏陽高校で盛大な祝賀会が行われた。この日、短期大学創設に心血を注いだ伊谷市長の感懐はひとしおで、伊谷は「一生を通じておそらくはこれにまさる喜びはない」とその思いを次のように語った。

「北見工業短期大学第1回入学式祝辞」

新緑山野にもえ万象悉(ことごと)く清気に満ちる本日の良き日を卜(ぼく)し、待望久しい国立北見工業短期大学の入学式を催されるに当たり、一言御祝詞を申し述べる機会を得ましたことは、私の一生を通じ、おそらくはこれにまさる喜びはないと存じまして、只々感激いたしておる次第であります。顧みまするに、北見市に国立大学を設置し、国策である本道開発の目的達成に寄与させたい念願は、かねてより当市の一大懸案でありました。私といたしましても本道の開発は、技術教育の振興であり、これこそ日本の生きる道であると固く信じ、これが設置に当たりましては全市を挙げてこれに当たり、近隣町村の方々はもとより全道民各位の厚き御協力と御支援をいただいて正に心血を注いで参ったのであります。幸いにして道内五国立大学学長各位の御勧奨と熱烈なる御支援のもとに、文部省御当局並びに北海道大学杉野目学長殿を始め、関係各位の深い御理解を得てここに国立北見工業短期大学が設置されることとなり、昭和34年これが設置準備会が結成されまして、諸般の情勢に対処されることとなったのであります。引き続き同年9月、いよいよ大学校舎の建設工事に着手し、関係者の日夜を分かたぬ御協力によりまして工事も順調に進み、正に教育の殿堂として誇るべきその近代的な雄姿をあらわしまして、ここに皆様を迎えめでた

く入学の運びと相成りましたことは、欣快この上もなく北見６万５千市民の等しく喜びとするところであります。本大学は国においても技術者教育のモデル校とされ、現在機械科並びに応用化学科の外近い将来電気科を含む３学科を設け、将来は専科大学として予科３年を含む５年制の技術者養成大学として進むべく、今後の発展に大きな期待が寄せられているのであります。年々農林業生産から工業生産機構充実の開発段階に直面している当地方にとりまして、益々有能なる青年諸君の活躍を期待しなければならない今日、卓越熱誠なる佐山学長殿を始め権威ある諸先生方が一体となって尽瘁せられる本学教育の成果は、期して俟つべきものがあろうと存じます。

本学は疎林の小丘をせ負って常呂川に南面し、大雪、阿寒の霊峰を遥かに望み東部市街地をふかんする絶好の環境に置かれ、その中ですくすくと勉学にいそしまれる本学学生諸君はこの恵まれた自然美の中で、情熱を燃やし、北見地方の開発を促進し文化を高める原動力となられるであろうことを深く信じて疑わないものであります。今後の北見地方は、この大学を中心として商工業は大きく伸展するでありましょうし、更に本学教育の充実を通じて豊かに明るく住みよい郷土の建設にまい進いたして参りたいと存ずるものであります。

終りに臨み本学設置に当り、並ならぬお骨折をいただきました文部省御当局並びに北海道大学、室蘭工業大学、帯広畜産大学関係各位を始め当市発展のために蔭に陽に御尽力を賜りました故五島慶太翁の御遺徳に対し、深甚なる敬意と感謝の誠を捧げる次第であります。

本日入学のお喜びの席に参列し所懐の一端を申述べまして祝辞といたします。

昭和35年５月20日

北見市長　伊谷半次郎

学則・教授会内規の制定と教授会の発足

短期大学の教授会規程は６月10日付で施行された。またこの規程による第１回教授会が開かれたのは６月30日であった。しかし開学時から初年度の大学の行事を決定し、またおびただしい用務を消化しなければならなかった教官陣は、５月７日第１回教官会議を開き、ここで初年度の非常勤講師の選考、時間割の編成、父兄後援会組織づくり、入学式次第などを協議した。その後、あいついで開いた教官会議でも学則の作成、カリキュラムの編成から当年度の予算配分など、大学運営の根幹となる重要事項を協議し実行していった。したがって教授会が成立するまでは、教官会議が重要な役割を担ったのであり、肝心の学則も教授会規程の作成に関する協議も教官会議で行われたのであった。そしてこの会議で審議された学則は、教授会の発足に先立って次のような内容で施行された。

「北見工業短期大学学則」

第１章　目的および使命

（目的および使命）

第１条　本学は教育基本法の精神にのっとり工業に関する実際的な専門職業教育を授け、中堅技術者として工業の発展に寄与しうる学力と識見をかね備えた有為な人物を育成することを目的とし、あわせて地方産業および文化の興隆に寄与することを使命とする。

第２章　学科および学生定員

（学科および学生定員）

第２条　本学に左の学科をおく

1.　機械科

2.　応用化学科

第３条　本学の学生定員は次の通りとす。

学　　科	入学定員	総 定 員
機　械　科	40名	80名
応用化学科	40名	80名
計	80名	160名

第３章　職員組織

（職　　員）

第４条　本学に次の職員をおく

学　　長

教　　授

助 教 授

講　　師

助　　手

事務職員

2.　職員の定員は国立学校設置法その他の法令の定めるところによる

3.　職員の職務は学校教育法その他の法令の定めるところによる

（事 務 部）

第５条　本学に事務部をおく

2.　事務部に関する事項は別に定める

第４章　教授会

（教 授 会）

第６条　本学に教授会をおく

2.　教授会に関する事項は別に定める

第５章　修業年限・在学期間

（修業年限）

第７条　修業年限は２年とする

（在学期間）

第８条　在学期間は４年をこえることができない

第６章　学年・学期・休業日

（学　　年）

第９条　学科は４月１日に始まり翌年３月31日に終る

（学　　期）

第10条　学期をわけて次の２期とする

前期　４月１日から９月30日まで

後期　10月１日から翌年３月31日まで

（休 業 日）

第11条　休業日は次のとおりとする

日曜日および国民の祝日

開学記念日

春季休業日　４月１日から４月15日まで

夏季休業日　７月20日から８月31日まで

秋季休業日　10月１日から10月７日まで

冬季休業日　12月20日から翌年１月20日まで

学年末休業日　３月20日から３月31日まで

2.　臨時の休業日は学長がそのつど定める

3.　場合により休業日でも授業を行うことがある

第７章　入学・編入学・休学・退学・転学・除籍

（入 学 等）

第12条　入学・編入学・休学・退学および転学は教授会の議を経て学長が許可する

（入学・編入学の時期）

第13条　入学および編入学の時期は毎年４月とする

（入学資格）

第14条　本学に入学することのできる者は学校教育法第56条および学校教育法施行規則第69条の定めるところにより次の各号に該当する者でなければならない

1.　高等学校を卒業した者

2.　通常の課程による12年の学校教育を修了した者　または通常の課程以外の課程によりこれに相当する学校教育を修了した者

3.　外国において学校教育における12年の課程を終了した者

4.　文部大臣の指定した者

5.　大学入学資格検定規程（昭和26年文部省令第13号）により文部大臣の行う大学入学資格検定に合格した者

6.　その他本学において高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

第15条　学生の入学は選考の上これを許可する

2.　選考のための選抜試験については別に定める

（編入学および再入学）

第16条　次の一に該当する者で本学に編入学又は再入学を願い出た者があるときは選考の上相当の年次に入学を許可することができる

1.　他の大学に在学中の者または在学した者

2.　本学を退学した者で再入学を志願する者

二、前項第１号に該当する者のうち現に在学中の者はその大学の学長の承認書を添えて願い出なければならない

（入学の手続）

第17条　入学を許可された者は規定の期日までに次の入学の手続をしなければならない保証人連署の誓約書および戸籍謄本

2.　第29条・第30条に示す入学料および授業料を納入すること

（休　　学）

第18条　疾病その他の事由によって２ヶ月以上修学できないときは学長の許可を得て、その学年の終りまで休学することができる

2.　休学期間は１ヶ年以内とする　ただし特別の事由があるときはさらに１年以内の休学を許可することがある

3.　休学期間満了の場合、または休学期間中にその事由が消滅した場合は学長の許可を得て復学することができる

4.　休学期間は在学期間に算入しない

5.　疾病その他の事由によって修学が不適当と認められる者については学長が休学を命ずることができる

（退学および転学）

第19条　学生が退学または他の大学に転学をしようとするときは理由書を添えて学長に願い出て許可をうけなければならない

（除　　籍）

第20条　次の各号の一に該当する者は学長が除籍する

1.　第８条に規定する在学期間をこえた者

2.　授業料の納付を怠り督促をうけてもなお納入しない者

3.　性行不良で改善の見込が無いと認められる者

4.　病気その他の理由により成業の見込が無いと認められる者

5.　正当の理由なくして出席常でない者

第８章　教育課程および科目試験

（教育課程）

第21条　授業科目は一般教育科目、外国語、体育および専門科目とし各授業科目の学科目および単位数は別表第１、別表第２および別表第３のとおりとする

第22条　学生は一般教育科目は人文科学関係科目４単位以上、社会科学関係科目４単位以上、自然科学関係科目８単位以上、外国語科目４単位以上、体育科目２単位、専門科目は機械科40単位以上、応用化学科40単位以上、合計62単位以上を履修しなければならない

第23条　各授業科目に対する単位数は次の基準によって計算する

1.　講義に対しては１時間の講義に対し教室外における２時間の準備または学習を必要とすることを考慮し、毎週１時間15週の講義を１単位とする

2.　演習に対しては２時間の演習に対し１時間の準備を必要とすることを考慮し、毎週２時間15週

の演習を１単位とする

3.　実験、実習、製図または体育の実技に対しては実験室または実習場において行われることを考慮し、毎週３時間15週の実験、実習、製図または体育の実技を１単位とする

（科目試験）

第24条　科目試験は、学期末および学年末に行う

第25条　科目試験の成績は優・良・可・不可に分ち、可以上を合格とする

第26条　試験に関する細則は別に定める

第９章　卒　　業

（卒　　業）

第27条　第６条に規定する期間以上在学し、所定の課程を履修し単位を取得した者に教授会の議を経て学長が卒業証書を授与する

第10章　検定料・入学料・授業料・聴講料

（検 定 料）

第28条　入学を志願する者、または第14条第６号に定める学力認定を受けようとする者は検定料金1,000円を納入しなければならない

（入 学 料）

第29条　入学を許可された者は入学料金1,000円を所定の期日までに納付しなければならない

2.　入学料を所定の期日までに納付しない者は入学許可を取消すことがある

（授 業 料）

第30条　授業料は年額7,200円とし次のとおり２期に分けて納付しなければならない

第１期（４月から９月まで）金3,600円　納期は４月30日まで

第２期（10月から翌春３月まで）金3,600円　納期は10月31日まで

（授業料の分納・延納および減免）

第31条　特別の事情により授業料を納めることができない者、または所定の納期に納付困難な者に対して願い出により減免、分納または延納を許可することができる

（退学等の場合の授業料）

第32条　退学もしくは転学した者、除籍された者、退学を命ぜられた者または停学中の者についてもその期の授業料は徴収する

（休学の場合の授業料）

第33条　休学を許可された者は次の期から月割計算により復学の前月まで授業料を免除する　復学した時は復学の当月より月割計算によりその期の授業料を徴収する

（聴 講 料）

第34条　聴講を許可された者は聴講料１単位につき金300円を所定の期日までに納付しなければならない

（検定料等の還付）

第35条　既納の検定料、入学料、授業料および聴講料は還付しない

第11章　聴講生・委託生・外国人学生

（聴 講 生）

第36条　本学の所定の学科中その１科目または数科目を選んで聴講を志望する者があるときは当該学科の授業に支障がない限りにおいて選考の上聴講生として入学を許可することがある

2.　聴講生に関する事項は別に定める

（委 託 生）

第37条　公共機関その他から委託生として入学の申出があったときはこれを許可することがある

2.　委託生に関する事項は別に定める

（外国人学生）

第38条　外国人で本学に入学を志望する者に対しては選考の上外国人学生として入学を許可することがある

2.　外国人学生に関する事項は別に定める

第12章　厚生保健施設

第39条　本学に厚生保健施設をおく

2.　厚生保健施設に関する事項は別に定める

第13章　賞　　罰

（表　　彰）

第40条　学生として表彰に価する行為があったときは学長は教授会の議を経て表彰する

（罰　　則）

第41条　本学に定める規則に違反しまたは学生の本分に反する行為があったときは教授会の議を経て懲戒する

2.　懲戒は訓告、停学および退学とする

3.　前項の退学は次の各号の一に該当する学生に対して行うことができる

1.　性行不良で改善の見込がないと認められるもの

2.　病気その他の理由により成業の見込がないと認められる者

3.　正当な理由がなくて出席常でない者

4.　学校の秩序を乱しその他学生としての本分に反したもの

附　　則

この学則は昭和35年５月20日から施行する

また、教授会内規作成のための審議は６月10日、第３回目の教官会議で決定し、同日の日付で施行となった。なおこの審議では、原案が教授会の構成を学長及び教授をもって組織するとし、附則で当分の間人事以外の事項については教授会の決議により助教授・講師を加えるとしていたものを、附則の「当分の間」と「教授会の決議により」を削除し、人事以外の事項の審議に助教授・講師を参加させることを恒常的制度とした。しかしこの後、本学では長く助教授・講師は人事に関する事項を審議しえない立場に置かれることとなった。

第1表　教養課程

系列	科目	単位	1年目 前期	1年目 後期	2年目 前期	2年目 後期	摘要
人文科学	哲学	2	1	1			4単位以上取得
	倫理学	2	1	1			
	文学	2	1	1			
	心理学	2	1	1			
社会科学	法学	2	1	1			同上
	経済学	2	1	1			
	社会学	2	1	1			
	政治学	2	1	1			
自然科学	数学	2	1	1			8単位以上取得
	数学演習	(2)	(2)	(2)			
	物理学	2	1	1			
	物理学実験	(1)		(3)			
	化学	1	1				
	化学実験	(1)	(3)				
	図学	1	1				
外国語	英語第一	4	2	2			必修
	英語第二	2			1	1	
	独逸語	2	1	1			
体育	理論	1		1			必修
	実技	(1)	(3)				
	計	31 (5)	15 (8)	14 (5)	1	1	

（備考）　最低必要単位26単位
（人文科学4・社会科学4・自然科学8・外国語8・体育2）

第2表　機械科学科課程

科目	単位	1年目 前期	1年目 後期	2年目 前期	2年目 後期	摘要
必修科目						
工業数学	1			1		
工業数学演習	(1)				(2)	
材料力学	3	1	1	1		
機械設計	2		1	1		
機構学	1	1				
機械工作法	1	1				
精密工作法	1				1	
工作機械	2				2	
水力学及水力機械	3		1	2		
工業熱力学	1			1		
蒸気原動機	2			2		

科目	単位	1年目		2年目		摘要
		前期	後期	前期	後期	
内燃機関	2			2		
機械材料	2	2				
電気工学概論	2			2		
電気工学実験	(1)				(3)	
機械測定法	1				1	
工作法実習	(2)	(3)	(3)			
材料実験	(2)			(3)	(3)	
機械設計製図第一	(3)	(3)	(6)			
機械設計製図第二	(5)			(6)	(9)	
(必修科目計)	24 (14)	5 (6)	3 (9)	12 (9)	4 (17)	
選択科目						3科目3単位以上選択すること。
化学工学概論	1				1	
自動制御	1				1	
運搬機械	1			1		
工場管理	1			1		
品質管理	1				1	
自動車工学	1				1	
(選択科目計)	6				4	
合計	30 (14)	5 (6)	3 (9)	14 (9)	8 (17)	

(備考) 最低必要単位41単位(必修38・選択3)

第3表 応用化学科学科課程

科目	単位	1年目		2年目		摘要
		前期	後期	前期	後期	
必修科目						
工業数学	1			1		
分析化学	2	1	1			
物理化学	2	1	1			
物理化学演習	(1)			(2)		
有機化学	2	1	1			
無機化学	1	1				
無機工業化学第一	1		1			
無機工業化学第二	1			1		
有機工業化学第一	2		1	1		
有機工業化学第二	1				1	
有機工業化学第三	1			1		
化学工学第一	1			1		
化学工学第二	1			1		
化学工学第三	1				1	
化学工学演習	(2)			(2)	(2)	
電気工学概論	2			2		

科目	単位	１年目		２年目		摘要
		前期	後期	前期	後期	
電気工学実験	(1)				(3)	
機械工学概論	2				2	
品質管理	1				1	
熱管理	1				1	
化学機械設計製図	(1)			(3)		
定性分析実験	(2)	(6)				
定量分析実験	(3)		(9)			
工業化学実験	(6)			(9)	(9)	
（必修科目計）	23 (16)	4 (6)	5 (9)	8 (16)	6 (14)	
選択科目						
応用化学特別講義第一	1			1		
応用化学特別講義第二	1			1		
応用化学特別講義第三	1				1	２科目２単位以上選択すること。
応用化学特別講義第四	1				1	
（選択科目計）	4			2	2	
合計	27 (16)	4 (6)	5 (9)	10 (16)	8 (14)	

（備考）　最低必要単位41単位（必修39・選択２）

「教授会内規」

第１条　本学に重要な事項を審議するため教授会を置く

第２条　教授会は学長および教授をもって組織する

第３条　教授会は次に掲げる事項を審議する

1. 学科、教育および研究施設の設置廃に関する事項
2. 内規の制定および改廃に関する事項
3. 予算に関する事項
4. 学術研究に関する事項
5. 学科目の種類および編成に関する事項
6. 学生の入学および卒業の認定に関する事項
7. 学生の試験に関する事項
8. 学生団体、学生活動および学生生活に関する事項
9. 学生の懲戒に関する事項
10. 教育公務員特例法またはその他の法例の規程によりその権限に属せしめられた事項
11. その他教育研究および運営上必要と認められた事項

第４条　学長は教授会を召集しその議長となる　学長事故ある時はその指名した教授これを代理する

第５条　教授会は教授全員の２分の１以上の出席がなければ成立しない　留学　疾病その他事故によって欠勤３ヶ月以上に亘るものは前項の定数に算入しない

第6条　教授会の決議は　出席全員の2分の1以上の同意によって決定される　賛否同数の時は議長の決するところによる

第7条　学長又は教授会が必要と認めたときは　教授会の構成員以外の職員を出席させることができる

第8条　前条による出席職員は　審議事項に関して意見を述べることができる　但し決議に加わることはできない

附　則

1. 人事以外の事項については助教授　講師を加える　この場合の教授会の定数は　助教授　講師を含めたものとする
2. この内規は昭和35年6月10日から施行する

内規を定めた6月10日の教官会議では、昭和36年度の予算配分についても審議した。額は245万円であった。

開学式

10月30日、北見工業短期大学の開学並びに校舎落成記念式が、竣工間もない市内北斗高等学校体育館で開催された。体育館を借りたのは、招待状を発した来賓が820名にも達し、そのころこれほどの人員を無理なく収容し得る施設が市内にはなかったからである。式場には文部大臣（代理）大臣官房長天城勲を始め短期大学創設に尽力した文部当局関係者、杉野目北海道大学学長を始め道内国立大学関係者、松田衆議院議員を始め道内出身衆・参議員、道議員らの政治家、町村知事を始め道関係者、道内市長、支庁管内町村長、市町村議員、市内外企業経営者、市民有志、短大教職員など500余名が参列、おりからのこの町の名物年中行事である菊祭りの華やいだ雰囲気を伴いつつ式典が挙行された。式次第は佐山学長の開学の式辞に始まり、那須北見市長（代理）助役の校舎落成式辞が述べられ、ついで短期大学創設に功績のあった杉野目北海道大学学長ら10氏に感謝状が贈られた。しかし、この日を最も強く待ち受けていた伊谷市長は、札幌の病院で療養中のため欠席、事情を知る参列者はその無念さをしのんだ。また大臣代理、北海道大学学長、知事は、それぞれ祝辞で伊谷市長の功績を称賛した。

「佐山学長の地元新聞への談話」

ここに本大学の開学式を行ない将来発展の基をきずくことはまことにめでたく喜びこれに過ぎるものはありません。本大学の設立は全く北見市民をはじめ各方面の絶大なる尽力の下に出来ましたので我等大学関係者一同の深く感謝致すところであります。本大学は専門技術の教授を行なうと共に実験実習を十分に行ない将来中堅技術者として工業の発展に寄与し得る人物を養成することが主な目的であります。わが国は最近工業の急激な発展に伴い各方面から有能な中堅技術者を多数要望されておりますから本大学はこれらの実状に鑑み学生の教育に資すると同時に常に工業技術の研究に励んで地方産業および文化の向上に尽したいと思います。しかし大学教育の本義はしっかりした人間をつくることが最も大切

でこれらの技術者は、1.心身共に健康で　2.合理的に考え能率的に行動ができ　3.協調性に富んでいる人間でなければなりません。このことは民主主義の目的にも合致いたすものでこれからの技術者教育はこういう道義的基礎の上に行われなければならないと固く信じております。本大学は現在機械科と応用化学の２学科ですがやがて電気科ができる予定でありまた近い将来に５年制の専科大学へと発展することが予定されております。将来本大学が名実共に充実して真に立派な大学として内外に重きをなす日を心から祈りつつ私の感想を申しのべた次第であります。

第2章　一般教育

短期大学が開学したとき、一般教育の授業科目と単位数は次の表のような構成をとっていた。

第1表　教養課程

系列	科目	単位	1年目 前期	1年目 後期	2年目 前期	2年目 後期	摘要
人文科学	哲学	2	2				4単位以上取得
	倫理学	2	1	1			
	文学	2	2				
	心理学	2	1	1			
社会科学	法学	2	2				同上
	経済学	2	1	1			
	社会学	2	1	1			
	政治学	2		2			
自然科学	数学及び数学演習	4	3	3			8単位以上取得
	物理学	2	1	1			
	物理学実験	(1)		(3)			
	化学	1	1				
	化学実験	(1)	(3)				
	図学	1	1				
外国語	英語第一	4	2	2			必修
	英語第二	2			1	1	
	独逸語第一	4	2	2			
	独逸語第二	2			1	1	
体育	理論	1		1			必修
	実技	(1)	(3)				
	計	37 (3)	20 (6)	15 (3)	2	2	

学生はこの中の、人文科学の科目から4単位以上、社会科学4単位以上、自然科学8単位以上、外国語12単位以上、体育2単位以上、合計30単位以上を履修しなければならず、しかも修業年限の関係で1年目で28単位を履修しなければならなかった。

これに配するに、一般教育の専任として予定された教官定員は4名にすぎず、これも学年進行とともに2名ずつ満たされるので、創立初年には、北海道大学理学部出身で数学を担当する石井純助教授（現弘前大学教授）と同じく文学部出身で英語を担当する山本幸男講師（現愛知県立大学学長）が赴任するにとどまった。この2人の赴任は、講義時数が比較的多い英語と数学の充足を急いだからとみられるが、これに加えて時間割が空かぬように専任の講義を繰り上げて行った

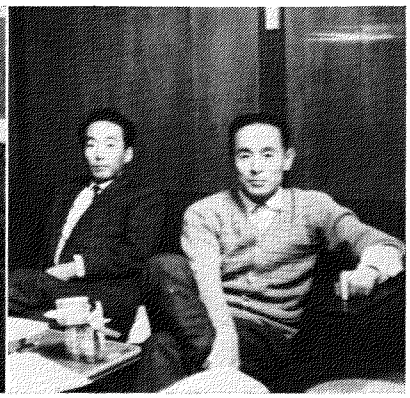
ので、英語と数学の講義が非常に多かった。当初は1回正味70分、翌年から65分となったが、石井教官は1年目学生に週6回ずつの講義を全学生に行ったが、後にはこれに加えて工業数学をも担当した。通年の講義を行う非常勤講師としては、ドイツ語を日本基督教会北見教会の小池創造牧師、体育実技を北見北斗高等学校の中西徳雄教諭、体育理論を日赤北見病院の小菅高之医師に委嘱した。

しかしこれでもとうてい開講科目が不足なので、8月に北海道大学工学部において集中講義を行った。

一般教育では経済学を札幌医科大学の三木、心理学を北海道大学文学部の川村、ドイツ語と哲学を同じ文学部の渡辺、政治学を法学部の清水、物理学を北海道大学の柏村・池田、物理実験を北海道大学の八鍬各先生に委嘱した。

初年度赴任の石井、山本両教官は、過去の体験や新設学校に対する研究・教育体制づくりについて発想のいろいろと異なる人々の間で、一般教育の体制をいかにつくるべきか、また学内の諸制度、組織をいかに樹立していくかについて何かと心労の多い日々を過ごさねばならなかった。加えて両教官の採用の辞令と給与も、その年の国会審議の遷延のため「定員法」の議決が遅れ「3ヶ月間国家から無給のまま」という取り扱いに耐えなければならなかった。教官たちは、講義が始まる前は、短期大学の設立事務所のあった北見市役所内教育委員会の一室に通勤した。新築の学舎に入ったのは5月中旬で、キャンパスから街への通路もまだ整備されず、雨が降って道がぬかるみの状態になると、学校と公園町の数百メートルほどの距離の往復にも苦労をしたらしい。一般教育の教官の学舎の個室には、研究棟2階の端の4室（現学長室奥）が割り当てられたが、後にこの1室に入った大野助教授（現教授）はそこから眺めた景色を「ここから窓越しに見える常呂川沿いの風景は四季それぞれに美しい北見原野の眺めを堪能させてくれる。私はなかでも早春から初夏にかけての柳その他の灌（かん）木の若緑の美しさが好きである。窓の右はじから左はじまで続く若緑の帯の美しさは飽かず眺めていることが出来る。またその頃は空にはヒバリがにぎやかに囀（さえず）り、すがすがしい郭公（かっこう）の声もふんだんに聞くことが出来て長い冬から開放された喜びを強く感ずる時である」と述懐した。机と椅子だけの教官室に若干の本が入るようになったのは1年経ってからで「設備の点では、教育のためにも、研究のためにも、前途の困難さを感ぜざるを得なかった」と石井教官は語った。そして同教官は、そのころの一般教育の問題として定員数の少なさ、予算の乏しさについて、「本学全体の定員数、予算自体が地域的特殊条件を十分には考慮されずに配分され、共通のなやみになっているが、更に学内の配分で、過分のしわ寄せを一般教育がかぶっていると看做し得るふしがあり、その他の理由と重なって、個人当たり実講義時間数は平均に多い。又今年度予算の配分規準、実験講座対非実験講座2対1も、非実験教官が共通の施設を利用しにくい実情を考慮すれば幾分問題があると思う」と語り、特に本学の一般教育が置かれた問題点を指摘した。また一般教育の体制づくりに当たっては、山本教官の緻密で周到な準備と実行力、物静かななかにも人を首肯させずにおかぬ説得力が専門学科の教官や事務職員の信望を集め、後のルールとなった実績が大きい。石井、山本両教官は2人とも学内の管理的職位を

左から２人目清水、４人目山本、５人目石井の一般教育各教官



右大野教官

自認する老壮年の教官からみると、当時若い世代に属しており、創設期の大学において、２人の意見や提案が優れたものでありながら、充分には生かしきれなかった憾(うら)みを残した点があったのではなかろうか。

年度が改まると、北海道大学理学部出身で物理学を担当する大野武敏助教授が招聘されて赴任し、創設人事に加えられていた同じく法学部出身で政治学を担当する清水昭典講師、物理学校（現東京理科大学の前身）出身で物理実験の北川啓助手も加わり、少ないながらも一般教育の定員は一杯となった。そして北海道大学低温科学研究所で研究履歴のある大野教官には、文部省から特別予算が認められ、低温実験室が設置され、本学で低温物理学の研究が進められる端緒がつくられた。また大野教官は研究の当面の課題を「凍上の機構と凍上防止剤」とし、石井教官は「線型束空間の上の或る作用素論」を、山本教官は「エリザベス朝の詩劇の衰退の要因」としていた。工業大学には珍しい文学の研究者で、イギリスの詩劇に強くひかれていた山本教官は、専門を異にする同僚に対し、文学のことを語ることはほとんどなかったが、山本の次の作詩にその関心をうかがうことができよう。

「沙翁礼讃」

海のむこうの　緑なすアルビョンの島で
「千　萬(ミリーアド)　人　の　心(マインディド)」の男が一人　テムズの流れに消えた
　美しきテムズよ、静かに流れよ
　わが歌のつくるまで
空虚な街のオリンピックでほじくり返えされた道を
一人孤影を引いた男が
手にしたのは沙翁著ハムレット一巻

また清水教官は当面の研究課題を「日本の地方政治の構造と動態」としていた。本も乏しく政治学の研究者との対話の機会も乏しい同教官にとって、北見という地方に住んでできる研究テー

マだった。

4人の教官は、いずれも専攻が異なり、直接研究上の見解を述べることはなく、他の人のお話を聞くにとどまった。しかし教養内部の体制づくりと運営については、各教官の“協調意欲”によってか、極めて円滑に行われたといわれる。しかし、これには初年度に赴任した2教官の尽力と彼らの翌年赴任する2教官に対する懇切な連絡、備品や予算への心くばり、研究教育に対する識見と人格の高さが一同の協調をもたらした因といっても過言ではなかろう。

4教官は、テニスの愛好家である大野教官のほかは皆スポーツは苦手であった。また石井教官は囲碁と音楽の趣味をもっていたが、当時アルコールを愛することでは人後に落ちず、山本、清水両教官はただアルコールを愛することにのみかかずらわっていた。そこで4つ並んだ研究室の同僚は、夕方からしばしばインスタントにコンパを開いた。日常の対話でも人の意表を突く石井教官のジョークは、アルコールが入るといよいよ冴えわたり、そのこっけいさに面々は抱腹絶倒した。ときには、部屋の近い佐山学長が何ごとかとのぞきにきたり、機械科の棟、追分両教官、応用化学科の後藤教官らがそのまま合流したりした。年に2、3度は懇親会が、1度は日帰りの小旅行が行われた。昭和38年の月報によると、秋にサロマ湖畔への小旅行が行われ「途中雨にあうも無事富武士展望台にてバーベキューを楽しみ鮭とかき貝を土産に午後4時帰学残り少ない陽光をたのしんだ」とあり、この日は道の端で荷台の傾いた大根馬車を教官一同で立て直し、お百姓さんからお礼に見事な大根の束をいただくというハプニングがあったことが思い出される。このような人間関係は、石井教官の転出と入れ替わって、数学の磯部講師が着任した後も引き継がれ、後年磯部教官は「現在のように人文系、自然系と云うような区別もなく、研究室も4つ並んでいて、面倒くさい会議もなく、それこそよろしくやっていたものです。当時のことですからみんな若かったので、それなりに張り切っていたと思います」としみじみ述懐している。なお北川助手は昭和39年電気科へ配置換となり、新たに小黒貢助手が着任した。小黒教官はこの後北海道大学工学部の東教授の指導を受け、氷の物性研究に取り組み、更に南極の越冬隊の一員としてキャンプに参加した。昭和40年には、磯部教官が1人で奮闘していた数学に定員が配置され、北海道大学理学部出身の小松典雄講師が10月1日をもって採用された。しかし、4人の講義担当者では到底カリキュラムを消化し得ず、あいついで非常勤講師を招かねばならなかった。昭和39年には経済学を北海道大学経済学部の長谷部亮一助教授（後の小樽商大学長）、数学を北海道学芸大学釧路分校の梶井定夫助教授、史学を北海道大学文学部の田原嗣郎助教授、心理学を北海道大学文学部の竹中治彦講師にそれぞれ集中講義として依頼した。そのころ集中講義は夏休みと冬休みを利用して行われたが、苦情をいう学生もなく、高名な非常勤講師の講義に強い関心をもち、既に単位修得ずみの2年目学生が聴講するという光景もみられた。また昭和40年には、通年の非常勤講師として北海道大学文学部出身の高橋薫講師が英語、北見柏陽高校の宮井講師が体育を担当した。集中講義には哲学をドイツから帰国したばかりの北海道大学文学部の秋間実助教授が、「現代哲学について――マルクシズム、プラグマティズム、実存主義――」という題で担当した。

短期大学の専任教官の研究業績は、昭和38年から発行された「北見工業短期大学研究報告」に

も発表され、昭和38年の第1号には、石井、山本教官、昭和39年の第2号には、山本、磯部教官、昭和40年の第3号には、大野、小黒、山本、清水教官、昭和41年の第4号には、清水、山本、磯部教官がその研究を発表した。

第3章　機械科

昭和35年4月、北見工業短期大学機械科は応用化学科とともに発足した。創立当初の教官及び職員は、4月室蘭工業大学より赴任（併任）の羽鳥勝春教授（北海道大学工学部昭和5年卒業）、5月着任（併任）の追分重義講師（北海道大学工学部昭和20年卒業）と9月菊地敬技官、10月小池明宏事務官を加えてのわずか4名であった。第1回の入学式は5月20日に挙行され、機械科の貫田元紀が宣誓した。開学初年度は、教官不足と実験実習設備の未整備、更に授業開始の遅れもあって、7月末から8月にかけての夏季休暇を返上し、北海道大学工学部に依頼して講義と実験実習を行った。このころの教官不足はどこの大学も深刻な悩みで、佐山総平初代学長並びに羽鳥学科主任（学生主事併任）の人探しには並々ならぬ苦労があった。

昭和36年6月、海上保安庁より松田和夫教授（京都大学工学部昭和11年卒業）が迎えられ、また同月北川武揚助手（室蘭工業大学昭和31年卒業）、次いで8月棟徹夫講師（北海道大学工学部昭和19年卒業）が着任、技術職員として6月に現在の最古参千田栄技官、更に10月小島基一技官を加え、一とおりの講義、製図及び実験実習を開講できるまでに至った。各教官の主たる担当科目として、熱力学関係を松田教授、水力関係を羽鳥教授、材力、設計関係を追分講師、工作関係を棟講師がそれぞれ分担していた。実験実習面での設備施設は必ずしも十分とはいえず、機械設備があってもこれに合う工具、測定具がないとか、各実験室とも何かと苦労が多かったが、直尺とパスだけは目立って豊富だった。教官にはまだ欠員があり、教官、学生ともにハードスケジュールで授業を消化しなければならず、午後の時間割は設計製図、実験、実習がびっしり組まれていて、空き時間はほとんどなかった。それでも特に年長者の多かった1期生の加藤（逝去）、佐藤（扶）、長津、三谷らは夜遅くまで製図及び実験実習の準備など教官の手助けを惜しまず、おかげでこの年度の実験実習を曲がりなりにも実施できる体制が整った。

短期大学初期の校舎は、殺風景な火山灰の小高い丘に、当時としては珍しくモダンな事務棟、図書館、15室の教官研究棟、講義棟、実験実習棟が小じんまりと建ち並び、野外にはよく野ウサギを見かけ、校内の廊下をときおりエゾリスが走り回るという実に静寂な環境にあった。当時は、教職員の数も少なく、教養、専門学科の区別を問わず、教官、学生とも誠に和気あいあいとしていた。現在の教養、機械工学科教官研究棟に面した深緑の白樺の大樹は、ちょうどこのころの教職員と1、2期の学生が総動員して植樹したもので万感思い出深い。

就職状況は、当時各業界とも技術革新が進み、高度成長の最盛期にあったが、最北端に設立して間もない短期大学のことでもあり、学科主任羽鳥教授は夏季工場実習、工場見学などを通じ、道内外の会社訪問等の就職運動に奔走した。1期生の主たる就職先として、日立製作所3名、トヨタ車体2名、北海製缶2名、北海道炭鉱汽船2名、函館ドック2名、日新製糖2名、石川島播磨重工、神鋼電機、ジーゼル機器などの民間企業のほか、北海道工業開発試験所2名、道立工業

試験場２名、陸運局、北海道大学、北見市役所、ホクレンなどの諸官庁、団体があげられる。１期生40名の就職も全員決まり、昭和37年３月第１回卒業式が以前の図書館（現会計課、施設課）で挙行され、佐山学長より機械科の鎌田敏広卒業生代表に卒業証書が手渡された。教官、学生、父兄を交えての卒業祝賀会はなごやかな中に感慨無量のものがあった。

昭和37年４月、追分講師は助教授に昇任、６月通産省より金山公夫講師（北海道大学工学部大学院修士課程昭和33年修了）が赴任、10月北川助手の講師昇任を加え、教官陣容がようやく充実した。短期大学は学科目制ではなかったが、便宜的に松田教授の熱力及び内燃機関研究室、羽鳥教授の水力及び水力機械研究室、追分助教授、金山講師の機械材料研究室、棟、北川講師の工作機械研究室の４研究室に分かれていた。各教官の担当科目は、工業熱力学、熱機関を松田教授、水力学、水力機械、空気機械、工場管理、暖房及び冷凍を羽鳥教授、材料力学、機械設計、設計製図を追分助教授、機械工作法、工作機械を棟講師、機械測定法、運搬機械を金山講師、機構学、機械工作法を北川講師がそれぞれ分担し開講していたが、このほか北海道大学工学部の教官に非常勤講師を依頼した講義も少なくなかった。研究面といえば、各教官とも講義、製図、実験実習の準備に追われ、そのうえ研究に必要な設備施設といったものは皆無に等しい状態であったが、この苦境のさなかに追分助教授は“材料の疲労強度に関する研究”に着手、金山講師は中庭に掘っ建て小屋をつくり、厳寒期の真夜中を利用して“充水鋼管の凍結に関する研究”を手がけていた。この年度、小島技官は事務部会計係に、また菊地技官は応用化学科にそれぞれ配置換になった。

昭和38年４月、新しく技術職員として佐伯義二技官と馬場弘技官が加わった。この年度は文部省からの特別設備費のほかに、産業後援会からの設備資金援助もあり、研究に必要な装置がわずかながら整備の方向に向かいつつあった。昭和38年度までの機械科の主要設備を列挙すれば、熱力及び内燃機関研究室の５馬力灯油発動機（三菱）、5.5kw電気動力計（旭電機）、単気筒11馬力ディーゼル機関（ヤンマー）、20馬力エアコンプレッサー、３気筒45馬力ディーゼル機関（ヤンマー、38年）、30馬力フルード水動力計（森）、水力及び水力機械研究室の渦巻ポンプ、４吋（インチ）多段タービンポンプ、歯車ポンプ、往復動ポンプ（各エバラ）、小型シロッコファン、流量測定用水路、小型風洞装置（１期生製作）、機械材料研究室の50トンアムスラー万能試験機、各種硬度計、西原式疲労試験機、シャルピー衝撃試験機（各島津）、動歪増幅器（新興）、ペン書きオシログラフ（渡辺）、光弾性実験装置（理研、37年）、工作機械研究室の平削盤（藤田）、形削盤（西谷）、フライス盤（本江）、４呎（フィート）普通旋盤（藤田）２台、５呎普通旋盤（栗田）２台、５呎高速旋盤（池貝）、ターレット旋盤（桐生、36年）、ならい旋盤（ワシノ）、直立ボール盤（吉田）、円筒研削盤（シギヤ）、小型ホブ盤（北井、38年）、鍛造炉、重油式溶解炉（辰巳）、アーク溶接機（三芝）、ガス溶接機、スポット溶接機（日立、37年）等の実習用設備のほか、バイト切味試験機、（佐藤工機、37年）、万能投影器（日本光学、36年）、工具顕微鏡（オリンパス、37年）、超あらさ計（三豊、38年）、鋳物砂試験機（新東、38年）等があったが、25年後の今日役目を終え更新されたものも数多い。

施設面では、機械科は大きな設備の割に建物面積が少ないのと、実験実習時に騒音を発生するなどの理由から機械科拡張工事が認められ、昭和38年12月内燃機関実験室（現伝熱実験室）が拡張増設された。更にこの年度は、水力機械実験室隣の便所を低温室に改造し、以後金山講師はここに閉じこもって充水鋼管の凍結に関する研究を継続していた。機械系学生のうちから人格、学業ともに優秀な学生に対して、日本機械学会から畠山賞が贈られるようになったのもこの年度からである。第1回の受賞者には越膳良臣が決定し、昭和39年3月の卒業式当日学長室にて、賞状と副賞としての賞金5,000円及び機械工学便覧1冊が贈賞された。昭和39年2月、小池事務官は事務部学生係に配置換となり、ついで3月馬場弘技官は、室蘭工業大学第2部機械工学科入学の希望もあって同大学工業化学科に転出した。

昭和39年4月、新しく本学第3期卒業生の仲島民雄技官と笹地恵子事務補佐員が加わった。機械科に初めて紅一点の職員が誕生したが、笹地は間もなく8月に図書館に配置換となり、同月、代わりに菅智子事務補佐員が採用され、これ以後の短大時代の機械科事務をすべて担当することになった。このころ、昭和42年から昭和48年にかけてのベビーブームによる学生増対策として、入学定員増や機械系学科増の話題が持ち上がっていたが、学科で検討の結果、教官人材が得られないこと、現学科の内容充実が優先するなどの理由から見合わせるといういきさつもあった。

4年制大学昇格の要望は昭和38年ごろより出ていたが、昭和39年7月文部省に対して設置申請を行うに至った。学科主任松田教授はこのときのための教官探しに道外を走り回ったが、「人材の得難いことを再認識した」としきりに嘆いていた。例年の学生工場見学は道外企業を対象としていたが、この年は引率教官の旅費不足という事態から道内工場を見学することになった。昭和39年6月の見学先は釧路製作所釧路工場、三栄精機製作所、北海製缶小樽工場、豊平製鋼、北海道農機具、函館ドック函館造船所、日本製鋼室蘭製作所、富士製鉄室蘭製鉄所の各工場で、どの企業も活気に満ちあふれていた。

この年度の卒業時に課される特別機械設計及び実験は運搬機械、内燃機関、水力機械の各設計製図と材料力学実験、水力学実験の5テーマで各教官が分担し指導に当たっていた。

昭和39年度に購入された設備として、100馬力フルード水動力計（森）、ねじり試験機（島津）がある。また施設として昭和38年度に引き続き第2期機械科拡張工事が行われ、現在の鍛造工場、鋳造工場及び材料力学第2実験室（現材料物性実験室）の延べ50坪が増設され、設備、施設とも一段と充実した。4年制大学設立要請に拍車をかけるかのように、各教官の研究活動もこのころよりにわかに活発になった。昭和39年9月、北川講師は北海道大学工学部精密工学科に内地留学を命ぜられ、6か月間“鋼の被削性に関する研究”に従事した。金山講師は昭和40年3月、日本鉱業会春季大会（東京）で“水を満して密封した鋼管の凍結に関する実験”と題して研究成果を発表している。昭和40年3月の卒業生に対する畠山賞は千葉勝義が授与された。

昭和40年4月、棟、金山講師はそれぞれ助教授に昇任した。同年5月には道外工場見学が再開され、金山助教授が、道内見学班は追分助教授がそれぞれ引率した。昭和40年4月、北川講師は精機学会春季大会(東京)で“構成刃先発生の歪と応力条件”と題して発表、同年9月の日本機械

学会北海道支部講演会（苫小牧）では棟助教授が“木材のロータリーカッテングに関する基礎研究”と題し、金山助教授が、“充氷鋼管の凍結に関する実験（第4報）”と題して日ごろの研究成果をそれぞれ発表している。昭和40年9月、棟助教授は“木材の加工に関する研究”で6か月間北海道大学工学部機械工学第二学科に内地留学を命ぜられた。昭和40年度の購入設備としては、実験用高速旋盤（三菱）、風洞装置（日本風力）、X線回折装置（理学電機）があり、主として教官研究用に供された。昭和41年1月には松田、羽鳥両教授の還暦祝いが、“初音”で追分助教授の音頭と機械科教職員、卒業生たちによって盛大に催され、両教授に記念品としての置時計が贈られた。昭和41年3月、卒業生に対する畠山賞は浜岡幸夫に決定し、贈呈された。昭和41年度よりいよいよ4年制大学への昇格が本決まりとなったため、この年の短期大学学生募集は中止され、代わって4年制大学1期生の募集が始まった。

昭和41年4月、4年制大学発足に伴って金山助教授は北見工業大学機械工学科に配置換（短期大学併任）となり、同月宇野和夫助手（北海道学芸大学昭和30年卒業）が新しく着任した。この年度は短期大学と4年制大学の教職員、学生が共存した過渡期で教職員の数が増え、学内がにわかににぎやかになった。昭和41年度短期大学最後の卒業生に贈られる畠山賞は沢口隆司に決まった。短期大学時代の学科主任として、機械科の運営に終始貢献された松田、羽鳥両教授は昭和42年3月をもって退官され、松田教授は広島工業大学に、羽鳥教授は中日本自動車短期大学に転出した。その後、松田教授は病魔に侵され、昭和52年6月11日に逝去された。在職中の故人をしのび霊安らかにと御冥福を祈る。また羽鳥教授は昭和53年ごろより病床に伏され、目下自宅にて療養中である。1日も早い快癒を願ってやまない。

昭和35年に発足した北見工業短期大学は、現在各界で活躍している6回の卒業生211名を送り出し、昭和42年3月をもって廃校になったが、同年4月ほとんどの教官、職員と設備施設はそのまま4年制大学へ移行し、今日の4年制大学発展の礎を築いた。

（機械科教官一同）

短期大学機械科非常勤講師と当時の所属及び担当講義は次のようであった。

久野陸夫教授　北海道大学工学部機械工学科、機械工作法

星　光一教授　北海道大学工学部精密工学科、精密工作法

深沢正一教授　北海道大学工学部機械工学科、自動車工学

斉藤　武教授　北海道大学工学部機械工学科、伝熱学
三浦良一教授　北海道大学工学部精密工学科、自動制御
半沢　宏教授　北海道大学工学部機械工学科、塑性学
磯部俊郎教授　北海道大学工学部資源開発工学科、工業数学
有江幹夫教授　北海道大学工学部機械工学科、流体工学
臼井英治助教授　北海道大学工学部精密工学科、精密加工学

第4章　応用化学科

昭和35年、北見工業短期大学の設置に伴って、同年5月20日、応用化学科にも40名の第1回生が入学した。発足当時の教官組織は佐々木満雄教授（北海道大学工学部応用化学科昭和21年卒業・室蘭工業大学工業化学科助教授・現青森大学環境社会学科教授）、伊藤昌明教授（東北大学理学部昭和22年卒業・北海道工業試験所主任研究員・現東日本学園大学教授）、後藤健三助教授（北海道大学農学部農芸化学科昭和33年卒業・同助手・元帯広畜産大学一般教養助教授）のわずか3名だけであった。なお、当時は60年安保闘争のあおりで予算案不成立のため、各教官は別の職場の名目で赴任し、正式発令は昭和36年1月のことであった。また、大学の建物も未完成のまま、講義は仮り住まいの建物の中でほそぼそと行われ、学生実験に至っては北海道大学工学部の実験室を夏休み中だけ借りて行う（引率後藤助教授）という、教官・学生ともに苦労の連続という状況であった。

しかし、昭和35年10月、大学の建屋が落成するとともに本格的な教育・研究に臨み得る態勢ができてきた。7月に岡宏（室蘭工業大学工業化学科33年卒業・現環境工学科助教授）が着任し、研究・教育の一翼を担い、秋には清水共子事務官（北見藤女子高校昭和35年卒業・現教務課入試係）が学科事務の支えとなるとともに教室に花を添えることになった。昭和36年に入ると、本間恒行(北海道大学工学部昭和29年卒業・現環境工学科教授)、藤田徹（北海道大学工学部冶金工学科昭和25年卒業・現函館工業高等専門学校機械工学科教授)、阿部和夫(小樽工業学校応用化学科昭和20年卒業・現東日本学園大学助教授)、大野豊(室蘭工業専門学校工業化学科昭和25年卒業・現旭川工業高等専門学校一般教養教授）などの諸教官がぞくぞくと赴任して、教職員組織もほぼ勢ぞろいした。昭和36年当時の研究室は第1（佐々木、岡）が工業分析部門、第2（伊藤、後藤、阿部）が有機工業化学部門、第3（藤田、本間、大野）が無機製造・化学工学部門を担当し、工業短期大学としての組織的な発足の年となった。その後、昭和39年には藤田助教授が函館工業高等専門学校に転出し、後任に新井助教授（北海道大学工学部燃料工学科昭和19年卒業・現工業化学科教授）が防衛庁航空技術本部から着任し、同年後藤助教授が帯広畜産大学に移った。しかし、同年菊地敬技官（北見北斗高校昭和30年卒業・現環境工学科技官)、見陣章彦助手（富山大学工学部金属工学科昭和39年卒業・現工業化学科助手)、昭和40年山田哲夫技官（北見工業短期大学応用化学科昭和40年卒業・現環境工学科助手）と新進気鋭の教官を得、ますます充実の期を迎えることになった。なお、旧職員中後藤助教授が昭和59年3月、帯広市において交通事故で亡くなった。御逝去を悼み、謹んでお悔み申し上げる。

この間、昭和38年には本間助教授が北海道大学工学部へ、昭和39年には伊藤教授がフランスのモンペリエ大学にそれぞれ留学し、当年度の学生の教育には若干の迷惑をかけたこととは思うが、教育研究面の内容充実のために教官・学生の協力を得て大学としての向上を図った時期でも

あった。

機械器具も研究費も少ない（１研究室７～10万円）この時期に各教官の努力によって研究活動も次第に活発となり、内外の諸学会に対する研究報告も年ごとに多くなった。昭和38～41年の間に発表された研究報告は、『Bull. Chem. Soc. Japan』・高圧ガス・香料・石油学会誌など６件、北見工業短期大学研究報告17件であった。画期的なことは、昭和36年９月、日本化学会・日本分析化学会共催の研究発表会が佐々木教授を始めとする諸教官の努力により北見会館（現北見経済センター、３条東１丁目）で開かれ、その後４年制大学に移行してからも数多くの学会・講演会などが行われる地歩を固めたことであろう。

設備の充実

教官組織の充実とともに実験・研究のための設備・備品等の設置も着々と進んだ。当初北見市役所を始めとして、産業各界・後援会などの寄付金による諸設備を基盤として、文部省特別設備費・科学研究費などの投入によって、一歩一歩大学としての自力を高めていった。その他、赤外・紫外分光分析計、ガスクロマトグラフなどの導入による分析手段の強力化を始めとして、昭和36年精密蒸留装置が有機物の分離に、昭和37年熱天びん・示差熱装置が熱分析に、昭和39年電子顕微鏡が物質の微細構造の研究とその解析に威力を発揮するとともに、気液接触塔（昭和37年）、伝熱工学実験装置（昭和41年）などが設置されることにより工学系学生の実験・実習に対する教育あるいは研究面の設備拡充がなされた。

また、文部省科研費（奨励研究・一般研究・試験研究・特別研究）を始めとし、北海道並びに各種団体からの科学研究費を受け、研究面での設備拡充が推進された。

工場見学

毎年恒例の工場見学が関東・関西地区又は道内企業に依頼して行われた。

１期・昭和36年５月・砂川―札幌―室蘭―函館（佐々木教授・岡助手）、２期・昭和37年３月・関東―関西地区（本間助教授）、３期・昭和38年３月・関東―関西地区（伊藤教授）、４期・昭和39年６月・札幌―苫小牧―室蘭（佐々木教授）、５期・昭和40年10月・札幌―苫小牧―室蘭（伊藤教授）、６期・昭和41年10月・関東地区（佐々木教授）、北見―釧路（岡助教授）であったが、都合により参加できない学生は当地方で北見パルプ・北興化学・芝浦精糖所（現北糖）などを見学し、所期の成果が得られた。

レクリエーション

昭和30年後半の時代は各教官も皆若く、張りきっていた時期で、実験研究はもちろん、スポーツを始めとするレクリエーションにおいても学生に１歩もひけをとらないころであった。職員と学生の対抗戦でも、野球では先生に何故打たれるのだろう、テニスでは何故負けるのだろう、バドミントンに至っては大人と子供の試合というわけで、学生を嘆かせた時代であった。また、酒

を飲んでも歌をうたっても職員の圧勝、特に阿部、大野、本間、岡らの若手ががんばっていたころであった。更に、佐々木、伊藤、新井のベテラン勢が老巧さを発揮していたから……。あまり詳しく書くのは、いやみになるので詳述を避けるが、古きよき時代のひとこまというべきであろうか。また、研究室対抗（年によっては職員・学生バラバラに4組対抗のときもあった）のスポーツ大会もひんぱんに行われ、北見の青空のもとで野球（このころはソフトボールはあまりなかった）・テニス・卓球・バレーボールなどに大いに親しんだものであった。その他職員のレクリエーション（昭和36年屈斜路湖―ジンギスカン　日帰り、昭和37年石北峠―温根湯、昭和38年知床―地の涯、昭和39年然別湖―化学装置懇談会、昭和40年芽登温泉―カボチャとカレイ、昭和41年阿寒湖―横断道路）はもちろん、各研究室ごとに美幌峠・網走湖・サロマ湖・層雲峡と山や海への旅行、キャンプ・サイクリングなどなど、このころは今と違いもっぱら汽車（気動車でなく）・バス・自転車・徒歩利用であった。また、尋ねてきた先輩を囲んで大学キャンパス内、野付牛公園でのジンギスカンの味も忘れられないものの1つである。

応用化学科の発展的解消

このような7年間6期にわたる歴史を経た後、昭和41年からの4年制大学に移行すべく、短期大学の学生募集は昭和40年をもって打ち切り、新たに4年制大学の工業化学科として発展的解消をとげることになった。昭和37年から昭和42年までの卒業生は計192名（うち女子5名）に及び、佐々木教授を始めとする各教官の努力で就職もほぼ順調、いまや道内外の官公庁・民間会社の研究室・現場における中堅層、あるいは幹部として現在、各地で活躍している。

随想いくつか

いささかセンチメンタルな感もあるが、最近の卒業生諸君にも一部同じ、あるいは違った感慨もあるかと思うので、北見と短期大学の昔を偲ぶために、昭和30年後半の先輩諸氏の追想文の一部を紹介して、それぞれに思いを新たにしていただけることを期待する。

古くから「歳月人を待たず」と言われている言葉がありますが、私自身も月日の去りゆく早さには驚いている者の1人です。先日開学25年を迎えると聞いて自分の耳を疑ったくらいで本当に早いものです。

私共が入学した昭和30年代は、日本全体が終戦後からの復興期を経て、高度成長経済に入る直前であったように思います。学内の諸設備も十分でなく建物自体も未完成のため入学早々学生全員が夏休みを返上し、札幌市内に下宿して、北大の休暇中空いている工学部施設を使っての化学の定性、定量の分析を始め各教科の集中講義を受けたことが記憶に残っています。

その頃の時代から25年後の現在は学科も増設され、今年度より大学院の設置も決定したと聞いておりますが尚一層の充実、発展を希望するものです。

（昭和37年卒業　川崎敏宏　現北見市役所）

コンパ……正直な話、私は始めて聞いた。何をするのかも知らないで出席したね初めは。しかし、2

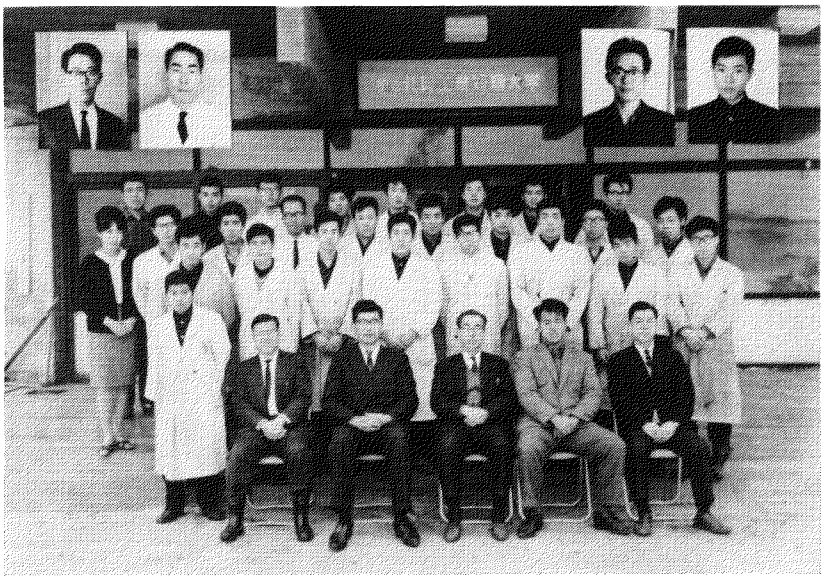
年目ともなると、コンパが楽しみの１つになっていた。飲む程に酔う程に、歌も出、日頃聞かれなかった諸先生の美声に心なごやかに、それぞれに２次会へと流れて行ったものだった。

その頃には、心の通じ合う友達も出来、時間のたつのも忘れ大いに議論し、より深く結ばれる様になった。この心の、清い結びつきを、いつまでも忘れることなく、何年後になろうと、学生時代の雰囲気になれるようになりたい。

（昭和38年卒業　斉藤征一　現三京化成大同研究所）

短大、学生生活が短い、入学した時にすぐ頭に浮かんだ。

しかし今こうして考えてみると、講義を離れてからの先生方との時間、大変なごやかで、充実していたと思う。テニス、この頃は同好会、陽の沈むのも忘れる次第、先生方に混じって職場対抗に参加した



第４期生および職員一同

屈斜路砂湯にて（阿部和夫氏撮影）

こともある。負けた方がビールということだったが、勝負は別にしてビールをいただいたこともある。

まもなく研究室に配属、不安がつのる。その不安を取り除いてくれたのが碁であった。〝碁を覚えない様ではこの研究室の単位を収めたとは言えない〟その言葉にハッスル、冷水塔というテーマ、塔を組んでは解体の連続、根気良く続けたものと感心、当時の相棒どうしているか懐かしい。

（昭和39年卒業　腰岡孝一　現腰岡建設）

北見駅舎、いとう・東急デパート、銀座通りなど北見の中心街は、20年前とは一変した。学生時代せいぜい喫茶店に出入りする程度で、飲み屋とはあまり縁がなかったのは私ばかりではないと思う。金もなく、車もないためか、仲間の所へ、自分の所へとよくたむろしたものである。女のこと、就職のこと、試験対策のことなど話の種はつきなかった。学生運動に身を投じ、その後音信不通のA氏のことが思い出される。久し振りに合う仲間の中には、もう頭の膚がよく見えるようになったB氏もいる。開学25周年を機会に一同集って、一杯やりたいものである。

（昭和40年卒業　山田哲夫　現北見工業大学環境工学科）

野付牛公園と長閑（のどか）な田園に囲まれた母校に入学したのは、昭和39年４月である。当時は、60年安保と44年大学紛争のはざまで学内も安定していた時代にあたり、研究室やクラスコンパでも口角あわを飛ばしてアジる人もなく、迫力のない話を肴に酒を飲む程度であった。したがって強烈な印象を残す出来事は、ほとんどなかったが、野付牛公園での３・４研対抗スケート大会やスキー旅行などが思い出されてなつかしい。18年後の今でも公園ではスケートやスキーが出来るのだろうか？

（昭和41年卒業　野村元治　現小樽市役所銭函浄水場）

３月上旬、最後の学期末試験を終え、学生諸君は各教官指導の下に、特別実験最後の追込みに入り、中には徹夜で頑張る学生さえいたが、その成果は３月15日、１日かかって講演発表された。講演件数は18件であった。同日謝恩会が新装まもない“ホテル黒部”の一階ホールに於いて催された。

３月19日、24名の卒業生（５期）を春雪舞うこの丘の上から送り出した。３年かかった３名の卒業生の笑顔が印象に残った。

（昭和41年４月　北見工業短期大学月報　第30号より）

５月14日夜、市内“むつみ会館”で新入生歓迎をかねて催された応用化学科（短大６期）および工業化学科（４年制１期）の学生懇談会に教官一同も招かれて出席。

（昭和41年６月　北見工業大学月報　第32号より）

以上、なんとなく思いついた短期大学時代の歴史のようなものを書きつらねてきたが、当時の卒業生の皆さんは今が人生・社会で最も充実し、また活躍できる時期であろう。これからの御多幸を願って筆をおく（次回50周年（？）　筆者はたぶん存在しないでしょう。これも歴史です）。

第5章　電気科の設置

昭和35年に北見工業短期大学が設置され、機械科、応用化学科の2科で発足したのであるが、先に北見市が作成した北見工業短期大学設置計画書の但し書きに、近い将来電気科を含むとあったが、昭和36年2月9日開催の第7回教授会で、昭和37年度増設を目指して、北見工業短期大学電気科設置委員会が設けられた。佐山学長を委員長とし、次の各教官が委員に発令された。

北見工業短期大学	羽鳥　勝春教授
	佐々木満雄教授
	山本　幸男助教授
	林　　芳次事務長
北海道大学工学部	浅見　義弘工学部長
	片山　辰雄教授
	俣野麻太郎教授

委員会は増設申請書を提出するとともに、佐山学長は早速教官の人選に当たり、北海道大学工学部及び室蘭工業大学の協力を得て、電気科発足の昭和37年4月、小川慎三郎（北海道大学工学部電気工学科卒）、品田雄治（北海道大学工学部電気工学科卒）の両教官が着任した。

また電気科第1回生として学生40名が入学し、ここに電気科のスタートをみたのである。

学科は発足したものの、実験室等が未整備であったので、第1回生の電気工学実験は、夏季休暇を利用し、北海道大学工学部電気工学科の実験室及び設備を借用して実施されたのである。これも今思えば懐かしい思い出であろう。

翌昭和38年4月に武田郁夫（北海道大学工学部電気工学科卒）、伊藤彰美（室蘭工業大学電気工学科卒）の2教官が着任し、学生も第2回生が入学し、更に新築工事中だった電気科の研究棟及び実験棟、その他が完成し、ここに北見工業短期大学電気科が名実ともに発足したのである。

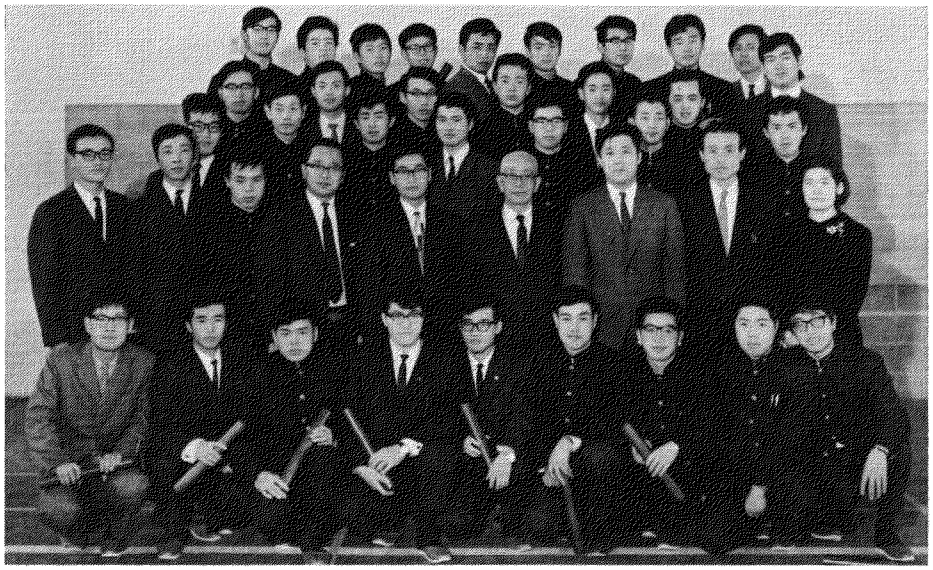
教官陣容については、当初6名を予定していたものが、4名となったために、北海道大学工学部に非常勤講師を依頼せねばならなかった。

電気科の発足時に、教育課程、実験設備等の計画作成に、北海道大学工学部電気工学科の、片山辰雄教授の多大の御指導があったことをここに付記しておく。

昭和39年4月、昭和40年4月とそれぞれ第3回生、第4回生の入学をもって、北見工業短期大学は募集停止となり、翌41年4月よりは北見工業大学電気工学科となったのである。

さて卒業生129名の進路について述べてみると、各企業の工科系短期大学に対する認識が低く、ほとんどの大企業では採用の対象にしてもらえず、求人先開拓に各地を回った小川教官の労苦は並々ならぬものがあった。なお卒業生の就職先については後述の電気工学科の章で述べる。

当時の4名の教官は、できるだけ学生の力をつけることと、卒業後の資格をとりやすくするた



電 気 科 第 3 回 生

めに多大の尽力をしたものである。例えば昭和39年度の時間割を見ると次のようになっている。カリキュラムでは、交流理論4単位であるものが実授業時数が7単位分、発送配2単位のものが6単位分、電気機械第二2単位のものが5単位分、電子回路理論1単位のものが4単位分といったような調子である。相当にハードであったが学生もよくがんばったものである。

また卒業後の資格として第2・第3種電気技術者の学校認定を受けるために、通産省と種々協議して、設備を整えるために、相当の苦労をしたものであった。

最後に、北見工業短期大学電気科は第4回生をもって、廃止されたがその歴史やカラーは、その後の北見工業大学電気工学科に引き継がれ、現在も生きているものである。

短大卒業生のますますの活躍を期待してこの章を終わる。

第6章　土木科の設置

設置の経緯

北見工業短期大学は昭和35年4月1日に創設されたが、土木科は、5年遅れて昭和40年4月1日に、4番目の学科として増設された。

記録によると、土木科設置の最初の動きとしては、昭和37年5月8日に開催された第33回教授会において、土木科設置委員会を置くことが議決され、委員長に佐山総平学長、委員に羽鳥勝春教授、小川慎三郎教授、佐々木満雄教授、大野武敏助教授、林芳次事務長、北海道大学工学部の酒井忠明教授、同横道英雄教授が委嘱された。そして、昭和38年度の増設を計画して文部省への折衝を重ねたが、この計画は認められなかった。

思うに、当時我が国における高等教育の方針には、大きく揺れた後の余震が残っていた。すなわち、5年制の専科大学法案は廃案となり、代わりに昭和37年4月1日に工業高等専門学校が発足して、全国に5校ある国立工業短期大学は、その行方を模索している時期でもあった。

しかし、創立当初から専科大学移行への構想をいだいていた北見工業短期大学は、佐山学長を中心に、4年制大学への昇格に向けて運動することになった。そして、その基盤となる短期大学の学科編成を4学科にするべく、更に強力な準備を推進した。

昭和39年7月14日に開催された第79回教授会において、再度概算要求を提出することが議決され、その後、教官の選考、カリキュラムの編成、施設及び設備などに関する具体的な内容が整備されて、昭和40年4月1日に土木科設置の運びとなったのである。

学科の変遷

北見工業短期大学土木科は昭和40年4月1日に設置されたが、短期大学の学生募集は昭和41年3月31日に停止し、かつ短期大学は昭和42年6月1日に廃止したので、短期大学としての土木科の機能は、2年2か月で終わったことになる。

一方、昭和41年4月1日に北見工業大学が設置されたので、昭和41年度は短期大学と大学が共存する過渡期でもあった。したがって、教職員は昭和40年度は短期大学としての発令であったが、昭和41年度には大学としての発令を受け、短期大学は併任の形をとっていた。また、学生については、昭和41年度は短期大学2年目と大学1年目がいた。

この間の教職員としては、昭和40年4月1日に松岡健一講師及び喜多琤子事務補佐員が発令になり、同年8月1日に笠原勝二郎教授が発令になった。続いて、翌昭和41年4月1日に菅原登助教授が北見工業大学と併任発令になり、同時に猪狩平三郎技術員が発令になった。すなわち、教官3名、技術員1名、事務補佐員1名の総勢5名であった。

この陣容では、いかようにしても教育を満たすことは不可能であり、多くの非常勤講師の依頼

を余儀なくされた。専門科目における非常勤講師として、昭和40年度には、北海道大学工学部の北郷繁教授、同山岡勲教授、同岸力教授、同中本明教授、北海道開発局網走開発建設部の小川達彦課長補佐、昭和41年度には、北海道大学工学部の菅原照雄教授、同加来照俊助教授、同寺嶋重雄教授、室蘭工業大学の松木憲司教授の協力を得て、学生への所定の課程を履修させることができた。そして、昭和42年3月18日に土木科第1回卒業生が巣立ったのである。

その後、松岡講師は北見工業大学助教授に昇任になったが、昭和43年10月に室蘭工業大学へ転出した。喜多事務補佐員は事務員、事務官に任官し、昭和45年7月に辞職した。また、笠原教授は北見工業大学土木工学科において講義を続け、昭和45年4月から昭和46年6月まで附属図書館長を併任したが、昭和47年3月22日に開発工学科へ配置換になり、昭和49年4月に停年退官した。

当時、土木科の研究室、実験室、講義室などの諸施設は、1号館の南側が当てられ、実験や実習に必要な設備は、コンクリート実験、土質実験、測量実習に関するわずかの機械器具類にしか過ぎず、水理実験室は水路も水槽もない部屋だけであった。

しかし、このような貧弱ともいえる設備ではあったが、学生は実験や実習を真剣に行い、講義室では熱心に聴講する姿が目立った。そして、あるときは、何日もの間深夜まで設計製図の課題に取り組み、それを完成させた。

2年目の後期に入って、学生は進学や就職への意志決定をする時期となり、短期大学土木科から3名が大学へ編入学することになった。残りの者の就職開拓に当たっては、北見工業短期大学土木科の知名度は低く、しかも短期大学としてただ1回だけの卒業生を社会へ送り出す道は非常に険しかった。しかし、道内外の官公庁や会社を訪問して、ようやく全員の就職を内定させることができた。

このように、短期大学としての土木科の存続期間は、大変短いものではあったが、これを母体として、現在の大学としての土木工学科へと移り変わってきたのである。

卒業生の動向

前述のとおり、土木科の卒業生はただ1回だけの40名であったが、残念なことに2名が死亡している。現時点で、官公庁に14名、建設業及びコンサルタント業に24名が従事している。

官公庁に勤務の者は、全員が北海道内における職域において、また、建設業及びコンサルタント業に勤務の者は、北海道、関東、関西と広い範囲に分布して、それぞれの能力を発揮し、中堅あるいは幹部として、公共事業費の伸び悩んでいる厳しい時期を、国土開発の一翼を担って活躍している。

最近訪れたある卒業生の話によると、卒業したときには先輩もいなく、また、大学の第1回卒業生が巣立つ昭和45年までは、後輩もいない孤立感をもたされたが、現在では、短期大学土木科及び大学土木工学科の卒業生は、合計655名（昭和60年3月現在）に達し、種々の会議や講習会、あるいは仕事上のことで、同窓生に遭遇する機会は多く、心強く思うとともに、最初の卒業生と

しての先駆者的使命感をもつという。

どこの短期大学でもまた大学にしても、創立当時は、教職員の陣容、施設、設備などにおいて恵まれない環境ではあるが、概して、そのころの卒業生には大成する人物が多いと聞く。それは、満たされない中での勉学が、かえって奮起への原動力になるのか、同時に延々と続く後輩への範とならんとする自覚なのか、卒業生のますますの健闘を期待してやまない。

「回 顧 談」

私は昭和41年に赴任した。当時、学生の行事としての短期大学祭には、北見の未来都市のパノラマや大径間吊橋の模型を展示するなど、土木工学に関連のある作品が多く見られた。

２年目の夏休み直前に、測量実習の総まとめとして、三角測量を常呂川の河川敷で実施したことがあるが、その約１週間は連日30℃を越す猛暑であった。このような暑さの中での実習を通して、学生は社会へ巣立つ貴重な体験をしたに違いない。

また、反面では、特異な学生も多かった。時には酒の勢いで蛮声を張り上げて歌う者、あるいは厳寒の雪の中を素足で走る者もいた。

時は流れて、開学25周年を迎えるに至ったが、過ぎし日のことが、巡る走馬燈のように際限なく思い出され、卒業生のそれぞれの面影が、鮮明に脳裡に焼きついている。

（菅原　登　北見工業大学土木工学科勤務）

「北見野萌えて茫漠と……」の学生歌も、私達が昭和40年４月短大土木科１期生として入学したころは、まさにという感じであった。場所は変わらずとも、北見市の変貌と大学キャンパスの様変わりには、時の流れを実感させられる。

新設の土木科は、２階に製図室があり、１階の土質実験室はわずかな器具しかない空間であった。そして、夏休みの大半は、非常勤講師による集中講義を、増築の抗打機の騒音の中で受けたりした。

先輩のいない私達土木科の学生は、勉強やアルバイトそして遊びの面にも強い連帯感を持っていた。今振り返ると微笑ましいことだが、先生方には随分迷惑をかけたと思っている。そんな私達も、今や道内外で中堅として頑張り、同窓生の１人であることを誇りに思っている。

この度、本学が創立25周年を迎えるに当たり、北見工大がますます発展されんことと、教職員並びに学生の皆さんの御健康と御活躍をお祈りして終わりとする。

（目黒義彦　武田作工株式会社勤務、昭和42年卒業）

「我々には科の先輩はいたいそうだ……」「その通りだよ、知らなかった？……」「威張られなくてすむなあ……でも……」等々のとぼけた会話から始まった入学式後の土木科の教室であった。

専門の教官は３名と少なかったためか、北大や各方面からの集中講義が多かった。また、土木科に先輩はいなかったが、学内外では他科の諸先輩には何かとお世話になった。

科の伝統などにとらわれないためか、良しにつけ……否、悪しきにつけ、団結力には特に自信があった。その意味でも、先生方には特段の迷惑をかけたが、それにもかかわらず、親身になって御指導下さり、今更ながら感謝している。

橙色の思い、痛恨の思い、様々な思い出を残しながら、見事？　無事？　全員卒業できたこと、また、現在に至っては8学科と発展されていることに対し、心から嬉しく思っている。

最後に、開学25周年を心から祝福するとともに、野付牛の伝統がますます盛んならんことと、教職員皆さんの御多幸を御祈念申し上げ駄文の終わりとする。

（北島良弘　宮脇建設株式会社勤務、昭和42年卒業）

第7章　学園生活

晴朗な春の日、新入生たちが揚げヒバリのさえずりの聞こえる校舎の露台に立つと、まだ人家のまばらな原野をゆるやかに輝いて流れる常呂川と、芽吹いたばかりの落葉松が青々と林立する川東の丘陵と、その上に水色に霞んで聳える山々が見渡され、彼らに地理的にも境遇的にもはるかに来たものだという漂泊の思いをかきたて、ここに腰を据えて学問をする決意を促させたのであった。

初夏、植栽したばかりの小さな白樺の木が嫩い葉を垂れ、野付牛公園の森に鳴く郭公が眠けを誘うころ、教室では開学の遅れを取り戻そうと、連日午前8時半から午後5時までみっちりと講義が行われた。機械1期生の三谷将之は次のように述べている。

> 学生主事は機械科主任の羽鳥教授。この先生の機構学、水力学は進むのが速くて、とてもボヤボヤしてはいられません。しかし話好きなうえ学生の話もよく聞いてくれ、なかなか人気があります。機械設計、製図と材料力学は追分教官。ものすごいファイトの持主。ただでさえむずかしい力学を英文の教科書で講義するのだから大変です。応用化学科の主任は佐々木教授。この人の分析化学もなかなかサボれません。このほかハッカの権威、伊藤教授と後藤助教授には物理化学をみっちり詰めこまれます。

一方創立のころ、特に開学年は教官も少なかったために、その負担が多く、一般教育の石井助教授の数学と山本講師の英語の持ち時間が多く、石井教官は「初年度前期の講義は、教官の関係で当然英語、数学がやたらに多かった。数学は正味70分で週6回ずつを全学生にやっている。1期生の意欲とみられる活発な質問があって、当初は張り合いがあった」と述べている。

盛夏、教官の数も実験・実習設備もいまだ整っていなかった本学では、北海道大学工学部の協力を得て、北海道大学で7月25日から8月27日まで夏休みを返上して講義と実験・実習を集中的に行うこととなった。教官は後藤、追分、羽鳥、伊藤、佐々木の順で、交代で北海道大学へ出張、佐山学長も札幌の自宅にあって、ときおり古巣の鉱山工学科の研究室に姿を現し、学生の学習に心を配ったり、翌年赴任予定の人々と面談を交したりしていた。

学生たちは各自市内に宿泊したが、中には古く寂しい禅寺や夏休みで空いている北海道大学の恵廸寮に宿泊する者もいた。午前中はそのころ白亜木造の工学部の階段講義室で一般教育の講義が行われ、哲学とドイツ語を非常勤の渡辺祐邦講師、政治学をやはり非常勤の清水昭典講師が担当した。

この2人は当時北海道大学の研究室におり、後に本学に赴任したが、休憩時間には出張中の伊藤教授、後藤助教授、追分講師らと顔を合わせ歓談した。この外経済学を札幌医大から三木、物理学を北海道大学工学部からの池田、柏村各非常勤講師が担当した。午後の機械工作法と物理実

験は北海道大学工学部の諸教官に依頼し、教養の化学実験と専門の定性分析実験を本学の伊藤教授ら専任教官が担当した。この年の夏はことのほか暑さが厳しく、寒暖計は連日30度を突破し、しかも朝から直射日光の射す木造の講義室では、教官も学生も汗びっしょりとなったが、学生たちの聴講姿勢は真剣そのものであった。出欠を取るときの返事の声の大きさ、しかも欠席ゼロ、居眠りをする者はおらず真剣にノートを取るという張りつめた雰囲気は、そのころ他の大学で非常勤講師をして、教室の落ち着きのなさに慣れかかっていた某教官を驚かせ、彼をして講義案づくりにより真剣たらしめたが、これは空前にして絶後の体験となった。応用化学科１期生の上ケ嶋慶一らは、哲学の渡辺講師から人間の自己疎外の問題を聞き「科学技術の発達によって機械文明は異常な発展を見せ人間はそのメカニズムの一部にすぎなくなっている。すべての人間は技術的に労働力の一員となり労働は技術に依存する。歴史は目的を失ない人間は現在を生きている。そしてその現在は空虚である。この現在に生きるのが現代人である。疲れた生活の中で感覚を求め機械的約束事の中で生きている。これは近代人ののがれられぬ宿命なのだ」と受け止め、自分たちが流行の中堅技術者の卵として社会に受け入れられようとしているということを楽観的にみる見方の拠って立つ基礎を考え直してみる示唆を得、この問題を仲間とともに語り合ったものであった。

一方、機械科の学生たちは、午後の実習で旋盤など、初めて接する工作機械が恐ろしげなものに思われたり、４人１組でブリキのバケツを製作してみたが、５時過ぎまで悪戦苦闘してようやくでき上がったが、形が歪み底の円形も変形という初心者の体験をした。

12月、北見市の尽力で待望の学生寮が構内（現職員会館前庭の位置）に完成、新明寮と命名し、学長が看板に揮毫した。建物材料は古材であったが総坪数120坪、モルタル仕上げの２階建てモダンなものであった。１階は寮生の食堂、浴室、トイレ、炊事室、管理人室で占められ寮生の居室はすべて２階に設けられ、６人部屋２、４人部屋４、２人部屋１、全部で７室収容人員30名であった。

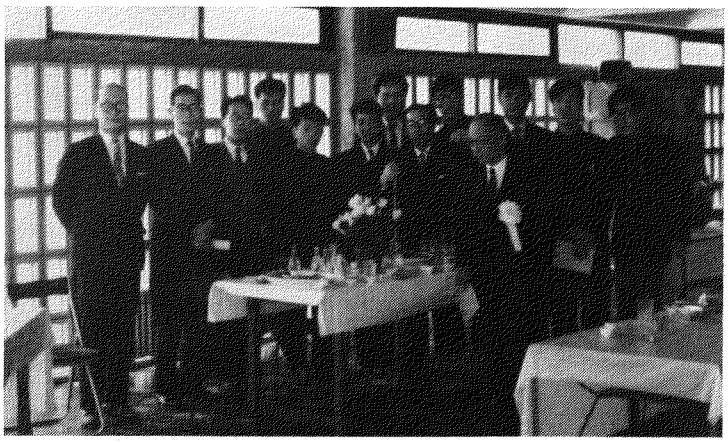
寮費その他は寮生全員で決められる自治寮であり、同じ年ごろの青年たちが家庭を離れ、良き

新明寮祭

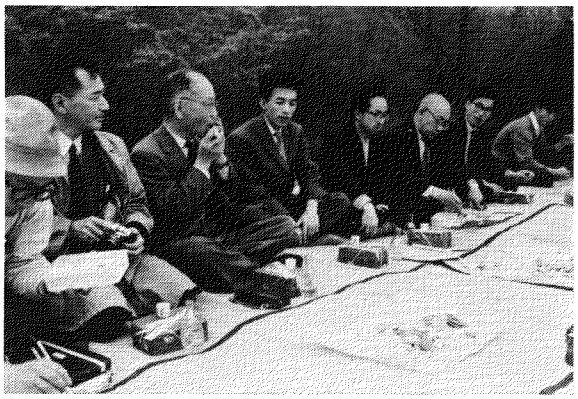
につけ、ときには悪しきにつけても自由な集団生活を送り、通学、下宿生をうらやましがらせたものであった。部屋では頻繁に小コンパが行われ、いかにして廉く酔うかという工夫の結果、焼酎、安ウイスキー、ビールのカクテルを一気にあおり、夜の野付牛公園を集団で疾走するという奇行が行われ、夜通し点灯で隣の住居に住む教官を感心させたが、多くの場合は徹夜のマージャンであった。メキメキと雀腕を上げた学生たちは、出入りの麻雀好きのクリーニング屋が御用聞きに来ると卓に誘ったが、彼らのワイシャツやズボンがいつも清潔だったのは、勝った結果だともいわれている。寮から講義室までは走れば1分もかからなかった。朝寝の顔は休み時間にボイラーの沸かし湯で洗っても、学生数が少なかったからボイラーマンはあまり苦情をいわなかった。

そんな寮に新入生として入寮した某君は、入試の前夜寮に泊めてもらい、アルコールを振る舞われ、歓談たちまち寮生活の魅力にとりつかれたのであった。彼はキタキツネやエゾシカが珍しくもなく、ときにはヒグマも姿を現すという根釧原野の奥に育ち、農村市街地の小さな高校を卒業し、北見のような都会は初めてで、見るもの聞くものすべてが新鮮という野生児で、合格通知は彼をいたく喜ばせたらしい。入学生の多くが札幌や旭川・函館などのマンモス高校から特急もなかった石北線の山また山の中を長時間をかけてやってきて、木造の貧弱な北見駅に降り立ち、待合室のダルマストーブにあたりながら、これから生活する町並みの軒の低さを見ていささか都落ちの気分に陥ったのに反し、某君の意気はまさに軒昂たるものであった。寮の新歓コンパで、入学以上に入寮の宿志を達した彼の瞳は輝き、蛮声を張り上げて出身高校の校歌を歌い、フィナーレのストームで爆発する青春の解放感に手を振り、足を挙げ、また踏み鳴らし、スクラムを組もうと手を伸ばす隣の上級生を「なんとすごい奴」と驚かせたものであった。

今と比べると、当時の学生たちは大方は貧しかったが、少し懐中に金のあるときは、連れ立って四条通り東小学校前の居酒屋「えくぼ」のカウンターで酒を飲んだ。酔いが回り長っちりとなり、声高にしゃべっていてもおばさんは優しかった。しかし青春の鬱屈を外の客との口論に向けたりする者がいると、おばさんは大声で叱りとばし、「帰って寝なさい」と追い出した。後年大学紛争に情熱を傾けた某君は、紛争が下火になるとひどい失意から夜ごと浴びるように焼酎のコップを傾けた。昼はバイト、夕方からも残業、深夜現れる某君に、おばさんはたびたび意見をしたらしい。たまたま酒を飲みにきた教官がいても、某君は徹底してこれを無視したが、おばさんの意見にはウンウンとうなずいていた。2、3か月後某教官が店に現れると、おばさんは、某君が学校をやめて内地の故郷へ帰って就職するので挨拶に来たこと、翌日北見の駅へ見送りに行ったことを告げたのであった。街の中心といわれる銀座街や稲荷小路、中劇小路の界隈には、若い教職員、学生が出入するスタンド「ロン」「ハト」「ウイスタン」やトリスウイスキーを飲ませる店、鍋物屋であった「以上」北見の地酒の直営店「摩周」、酒ばかりでなく簡単な食事のできる屋台のような数々の小店もあった。札幌から着任したばかりの某教官は、夕方その店の一軒でビールに喉をうるおし勘定を払おうとすると「どうぞつけていってください」といわれ、一見の客に飲み代を貸そうという経営者に不思議な顔を向けると、「さっきまで隣で飲んでいた学生さ



第１回卒業式祝賀会



北友会花見

んが今度来た先生だと教えてくれましたので」という。この小さな町では、住人の身元がわかりやすく、大都市の歓楽街とは異なって、薄給の教師や仕送りで生活する学生でもけっこう歓迎されぬでもないことを知るには、某教官はその後の２、３軒の飲食の経験で事足りたのであった。

当時この町には純喫茶と称する店、「キャンドル」「モカ」「エデン」「田園」「コロンビア」「朝日堂」。新しいモダンな店では「門」などがあった。このなかには名曲を聴かせたり、絵の個展を開く店もあり、しばしば地方文化人を自称する子女がたむろしていた。芸術や文学を愛する感受性豊かな一部の短大生は、この雰囲気に牽かれて、しばしばこの店のドアを押したものであった。なかでもフィッシャー・デイスカウの歌うシューベルトの「冬の旅」をこよなく愛する某君は、店内の石炭ストーブがときおり火屑をこぼすほどに燃え、ドアのガラスに吹きつける雪が溶けて幾条もの筋となり、外の景色が濡れて歪むのを見ながら名曲を楽しんだ記憶を40代半ばに達した今も大切にしているという。